ISSN －1340－377X

広島体育学会

広島体育学研究

第 48 巻

総説

松本　佑介，白石　智也，齊藤　一彦
長距離走授業の成果に関する研究レビュー
―生徒の長距離走に対する態度に着目して― …… 1

研究資料

趙　月輝，齊藤　一彦，山平　芳美，藤島　廉
中国における学校健康教育の歴史的変遷 ……15

令和３年度広島体育学会　研究発表例会・奨励賞授与式及び講演会

2022

「広島体育学研究」投稿規定

昭和45年10月11日　制定
昭和53年７月25日　改正
平成６年６月25日　改正
平成７年３月４日　改正
平成23年６月３日　改正
平成28年５月19日　改正

1．本誌に投稿できるのは，本学会員（正会員，準会員）および編集委員会が認めた者とする。
2．論文は，体育・スポーツに関するものであり，総説，原著，実践研究，事例報告，研究資料，書評に区分し，完結した未発表のものであり，他誌に投稿中でないものに限る。
3．総説は，特定の研究領域に関する主要な文献内容の総覧であるが，その内容は，単なる羅列ではなく，特定の視点に基づく体系的なまとまりを持つことが必要である。
4．原著論文は，科学論文としての内容と体裁を整えているもので，新たな科学的な知見をもたらすものであることが必要である。ただし，人文系と自然系の論文構成には違いがあるので，論文の構成や見出しはそれぞれの研究領域に応じて適切なものを用いること。
5．研究資料は，調査や実験の結果を主体にした報告であり，体育学の研究上，客観的な資料として価値が認められるものである。この場合，原著論文に必要な見出しや，それに相当する内容のすべてを含む必要はないが，関連研究とのつながりの中で，その資料を提出することの意義が明らかであり，資料そのものの説明が十分になされていることが必要である。
6．実践研究は，現場からの貴重な情報を基にした研究で，指導法に関する実用的研究や，総合的に分析した研究などが含まれる。
7．事例報告は，特定の少数の事例を詳細に調査・研究し，その結果を報告することによって，体育学の発展に寄与できるものである。
8．書評は，新たに発表された内外の著書・論文を紹介・批評したものである。
9．論文は，別に定める執筆要領に準拠して作成し，総説・原著論文・実践研究・事例報告・研究資料・書評などの区分を指定して，「広島体育学研究」編集委員会あてに提出するものとする。
10. 投稿論文は，編集委員会が審査し，掲載の可否を決定する。
11. 本誌の発行は年１回とし，各年度の投稿の締切りは9月末日とする。ただし，投稿の受付と審査は年間を通して行う。
12. 投稿論文は1部提出する。投稿の際，本文，図表，写真，その他の資料（付録などを含む）が記録されたファイルも提出する。標準のファイル形式は Word，Excel，PowerPoint とする。またテキスト，PDF といったファイル形式でも提出可とする。本誌に掲載された論文の原稿は，原則として返却しない。返却希望があれば，投稿時にその旨申し出るものとする。
13. 著者校正は初校のみとする。校正は誤植など印刷上のミスによるものにとどめ，文章などの加除は認められない。
12. 別刷りは著者校正時に希望部数を申し出るものとし，費用は著者の負担とする。
13. 本誌に掲載された論文の著作権は，広島体育学会に帰属するものとする。

「広島体育学研究」執筆要領

平成７年３月４日　改正
平成23年６月３日　改正
平成28年５月19日　改正

1．投稿論文の長さは図・表などを含め，総説は12ページまで，原著は10ページまで，実践研究，事例報告，研究資料は８ページまで，書評は2ページまでとする（１ページの文字数は刷り上り全角約1600文字）。
2．原稿の執筆にあたっては，下記の点を厳守すること。
（1）原稿は文書作成ソフトで作成する。A4判縦置き横書きとし，全角40 字30行（英文綴りおよび数値は半角）で，フォントの大きさは10.5ポイントとする。本文は現代かなづかいとし，外国語をかな書きする場合はカタカナで表記すること。
（2）原稿は，１枚目に論文の区分，論文題目，２枚目に著者名および所属機関名とその所在地（和文および欧文）ならびに投稿者の連絡先（郵便番号，住所，電話番号，E-mail アドレス）を，３枚目に欧文要約（250語以内）を，４枚目に欧文要約の和訳を記載する。５枚目以降に本文，参考文献，表，図を，この順に書くこととする（書評については，欧文要約は不要）。なお，原稿のページには通し番号を，各ページには行番号をつけること。
（3）外国人名・地名等の固有名詞には，原則として原語を用いること。固有名詞以外は訳語を用い，必要な場合は初出のさいにだけ原語を付すること。
（4）文献表の見出し語は「文献」とする。文献の記載は，原則として著者名のアルファベット順とする。定期刊行物の書誌データは，著者名，発行年，論文題目，誌名，巻（号），ページの順とする。また，単行本の場合は，著者名，発行年，書名（版数，ただし初版は省略），発行所，発行地，引用ページ（p. または pp.）の順とする。書式は下記の例に従うこと（書式等の詳細は，体育学研究『投稿の手引き』を参照のこと）。
「定期刊行物の例」
Neumann, M. and Eason, D. (1990) Casino world: Bringing it all back home. Cult. Stu., 4 (2): 45–60. 関　修（1990）ストレスを癒すフィジカル・エクササイズ．イマーゴ，1 (3): 172–181.
「単行本の例」
Moony, J. (1983) The Cherokee ball play. In: Harris, J.C. and Park, R.J. (Eds.) Play, games and sports in cultural contexts. Human Kinetics: Champaign, pp. 259–282. 新島龍美（1990）日常性の快楽．市川浩ほか編　技術と遊び．岩波書店：東京，pp. 355–426.
（5）図と表は１枚の用紙に１つだけ書き，それぞれに一連番号をつけること。また，挿入箇所は，本文の欄外に赤字で指定すること。
3．研究の遂行に当たっては，人権の尊重と安全の確保を最優先し，かつ法に基づき研究が行われることに充分な配慮がなされなければならない。また，動物を対象とする研究においても，動物愛護の精神に基づいて，同様の倫理的配慮がなされなければならない。

広島体育学研究　48：1 ～ 14，2022

〔総説〕

長距離走授業の成果に関する研究レビュー
―生徒の長距離走に対する態度に着目して―

松　本　佑　介 *
白　石　智　也 **
齊　藤　一　彦 ***

Outcomes of Long-Distance Racing Classes: A Literature Review Focusing on Students' Attitude toward Long-Distance Racing

Yusuke MATSUMOTO
(Graduate School of Humanities and Social Sciences, Hiroshima University)
Tomoya SHIRAISHI
(Hiroshima Bunka Gakuen University)
Kazuhiko SAITO
(Hiroshima University)

Abstract

This study aimed to provide a resource for physical education teachers to conduct classes that can help reduce students' dislike of long-distance races. To achieve this purpose, we reviewed previous research on long-distance racing classes to identify the results and the factors that produced these results from the perspective of improving students' attitudes toward long-distance racing. The results of this study revealed the following five points. (1) Factors related to "motivation" were considered to be the content and method of learning and included learning running techniques and LSD training, encouragement from teachers, and peer interaction. (2) Factors related to "achievement" were the learning content and method, and they included setting opportunities to apply learnings to one's own running, observation and analysis of one's own and peers' running techniques and styles, and cultivation of awareness of physical control. (3) Factors related to "collaboration" were considered to be group and pair learning. They included relay races and measuring each other's pace in pairs, the teacher's valuing of cheering, and the display of pulse rate using tablets during exercise. (4) Factors related to "favorable" results included the achievement of the long-distance race goals in the course of study, learning contents and methods as mentioned in "motivation" and "collaboration," acquisition of a sense of pace, feeling of accomplishment, and improvement of a sense of control. (5) Positive interaction with peers was related to "discomfort."

* 広島大学大学院人間社会科学研究科，** 広島文化学園大学
*** 広島大学

Ⅰ．緒言

保健体育科の目標は，生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現・継続するための資質・能力を育成することである（文部科学省，2018，2019）．その中で，保健体育科で取り扱われる運動種目のうち，生徒に好まれない種目の代表格として，しばしば長距離走が挙げられる（佐藤・藤田，2009；品田，2010）．また，長距離走嫌いの生徒の割合は，学校種及び学年の進行に伴って増加するという指摘（小磯ほか，2017）があるように，長距離走授業の経験を通じて，生徒は長距離走に対する忌避感を抱くことが窺える．体育授業では，生涯を通じて運動・スポーツへ参加する意欲を高める必要があること（Green，2014）を踏まえると，長距離走嫌いの生徒が多く存在する実態の改善は，喫緊の課題であると考えられる．

以上のような背景から，先行研究において，工夫を凝らした長距離走授業が数多く実施されてきた．その中でも，とりわけ，生徒の長距離走に対する態度の育成が重点的に検討されてきたといえる．一方で，尾縣（2016）が，自身が経験したタイム・トライアルのみが10時間続く授業を例に出し，「おそらく日本中の中学校，高校の長距離走の授業の中には，このような拷問のような授業が未だに残っている」(p.14) と述べているように，現在も学校現場において，生徒の長距離走嫌いを助長するような授業が行われていることは，想像に難くない．このことを鑑みると，中学校及び高等学校の保健体育教師（以下「体育教師」と略す）が，長距離走嫌いの生徒を生み出なさい，あるいは，減少させるような授業を実践していくことが望まれる．

他方で，体育授業の改善のために，先行研究のレビューは有益であると考えられる．なぜなら，田中・市川（2011）は，文献レビューを通じて複数の知見を統合することについて，「個々の研究を超えた包括的で重要な知見」（p.206）を得ることにつながると主張しており，体育授業に関する先行研究のレビューは，体育教師が授業改善に向けて参照可能な重要な資料になり得ると換言できるからである．したがって，先述したような体育授業における生徒の長距離走に対する態度を改善していくためには，先行研究において実施されてきた，態度の育成を意図した授業の成果，並びに，その成果の要因について，複数の知見を理解しやすいように統合することが有用であると思われる．しかしながら，そのような視点に立った研究は未だ行われていない．

そこで本研究では，長距離走授業に関する先行研究のレビューによって，生徒の長距離走に対する態度の視点から，これまでに蓄積されてきた成果及びその成果の要因を整理した．これによって，体育教師が，長距離走嫌いの生徒の減少に貢献し得る授業を実践するための一資料とすることを目的とした．

Ⅱ．方法

2.1.　調査内容

Randolph（2009）は，「多くの研究レビューの目的は，研究結果を統合したり，合成したりすることである．そのため，すべての研究成果を変換できる共通の指標や測定法を特定する必要がある」（p.8）と述べている．他方で，これまでに述べた長距離走嫌いの問題に関連して，小磯ほか（2018）は，生徒の長距離走に対する態度が「意欲」，「成果」[注1]，「協働」，「好感」，「不快」，の５因子から構成されることを明らかにしている．それぞれの態度の具体的な内容は，表１に示した通りである．そこで，本研究においては，この小磯ほか（2018）の５つの態度の視点から，先行研究で実施されてきた長距離走授業に関する成果及びその成果の要因を整理した．

2.2.　調査方法及び分析方法

長距離走授業に関する先行研究を収集するために，国立情報学研究所が運営する文献データベースであり，「日本の研究論文を網羅的に検索するという観点」（牧野，2020，p.77）において優れている，CiNii Articles を用いて検索を行った．具体的

には,「長距離走　体育」,「長距離走　授業」をキーワードに検索を行い，計 363 件の先行研究を抽出した．なお，検索日は 2021 年 5 月 28 日であった．

まず, 重複している先行研究を除外したうえで，一次スクリーニングとして，収録刊行物を確認したのち，題目，要旨を読み，シンポジウム資料及び学会発表要旨，並びに，長距離走授業に関連しない先行研究を除外した．次に，二次スクリーニングとして，全文を精読し，授業の成果の中で，生徒の長距離走に対する態度について言及されていない先行研究を除外した．その結果，20 編の先行研究が抽出されたため，この 20 編を分析の対象とした（表 2）．これらのデータ収集については，筆頭著者が単独で実施した．

そして，分析の対象とした先行研究 20 編について，著者 3 名がそれぞれ精読して，小磯ほか（2018）の長距離走に対する 5 つの態度の視点を基に，先行研究において実施された長距離走授業の成果及びその成果の要因に関する記述を抽出した．次に，著者 3 名それぞれが抽出した記述を持ち寄り，協議を通して,「意欲」,「成果」,「協働」,「好感」,「不快」，の 5 つのカテゴリーに演繹的に分類した．なお, 協議において, 複数のカテゴリーに関連する記述があることが確認されたため，それらの記述に関しては，複数のカテゴリーに含めることを制限せずに検討した．最後に，川喜田（1970）の KJ 法の 4 つのステップのうち,「紙きれづくり」(p.48) と「グループ編成」(p.56) を用いて，各態度に分類された記述を，帰納的に分類した．具体的には，著者 3 名の協議を通して選定された記述を紙きれに付す作業を行い，各紙きれで内容が類似したものを小グループとしてまとめた．そして, この小グループで類似したものを，さらに大グループとしてまとめた．なお，この帰納的分類については，内的妥当性を担保するために，著者 3 名で行い，意見が一致しない箇所については，3 名が納得できるまで討議を行い，解釈の収束点を模索した．

Ⅲ．結果

分析の対象となった紙きれの数は, 56 枚であった．これらについて，小磯ほか（2018）の長距離走に対する 5 つの態度の視点による演繹的分類，並びに, 各カテゴリーにおける帰納的分類の結果，表 3 から表 7 までに示した通りに分類することが可能であった．

Ⅳ．考察

小磯ほか（2018）は，長距離走の 5 つの態度の視点それぞれによって, 変容の様態が異なること，また，5 つの態度の視点に対応した改善策を，授業実践によって実証することの重要性を指摘している．そこで，小磯ほか（2018）の 5 つの態度の視点から，先行研究において検討された長距離走授業の成果及びその成果の要因に関する知見を整理したい．

4.1.「意欲」に関わる成果の要因

生徒が記録に挑戦しようとしたり，授業に前向きに取り組んだりする「意欲」に関する成果をも

表 1　長距離走に対する態度を構成する 5 因子

因子名	内容
意欲	長距離走の成績（タイム）を良くしようとしたり, 前向きに取り組もうとしたりする意欲を示す.
成果	長距離走の授業における学習の成果として得られることを示す.
協働	長距離走やその授業における仲間との協力や学び合い, それを築くことができる人間関係を示す.
好感	長距離走やその授業に関して肯定的でよい印象を抱いていることを示す.
不快	人間関係のネガティブな面や不快な面を示す.

小磯ほか（2018）を参考に筆頭著者が作成

表2　本研究において分析対象とした先行研究一覧

番号	著者	発行年	題目	掲載雑誌名，巻（号），ページ
1	高田俊也・荒井貴美人・船引英光ほか5名	1998	意欲的に取り組める長距離走実践の検討	実技教育研究，12，87-99
2	渡辺保志・植屋清見	2003	生きる力を育む体育学習 ―中学校における長距離走の授業実践から―	山梨大学教育人間科学部紀要，5（2），187-196
3	富川浩・城後豊	2005	「長距離走」における大学と中学校の連携の実践	北海道教育大学紀要 教育科学編，55（2），13-18
4	原通範・吉田恵介・谷興治ほか1名	2008	ペースランニングにおける授業実践の検討 ―初めてのペースランニング実践を対象として―	和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要，18，131-139
5	新冨康平・中田富士男・小原達朗ほか2名	2010	運動有能感を高める体育の授業の工夫 ―長距離走の授業実践―	教育実践総合センター紀要，（9），197-206
6	岡本昌規・合田大輔・高田光代ほか5名	2011	心と体の変容に対する認識と論理的思考力を育てる授業 ―3000m ペース走をとおして―	学部・附属学校共同研究紀要，（39），123-128
7	澤﨑弘英	2011	自分にあった効率的なフォームを協働で探る長距離走授業の検討	福井大学教育実践研究，36，85-89
8	小磯透・小山弘	2012	中学校長距離走授業におけるイーブンペース走学習の成果	発育発達研究，（55），11-22
9	岡本昌規・合田大輔・高田光代ほか3名	2012	走法（ランニングフォーム）の学習を取り入れた長距離走の授業 ―3000m ペース走をとおして―	中等教育研究紀要／広島大学附属福山中・高等学校，52，269-278
10	山本泰明・中垣内真樹・新冨康平	2012	中学体育授業における生涯スポーツを指向した長距離走指導方法の工夫 ―統制感を高めることを目指して―	環太平洋大学研究紀要，5，111-116
11	澤﨑弘英	2013	グループの仲間と協働で取り組み，自分の学びにつなげる ―団体戦で取り組む「長距離走」の授業（第2学年）―	福井大学教育地域科学部附属中学校 研究紀要，41，135-141
12	田口智洋	2013	ペア学習による長距離走の実践 ―限界に挑戦し，仲間と共に高め合える集団を目指して―	人間教育 ふぞくの歩み，54，60-63
13	小山浩	2015	中学校保健体育「長距離走単元」の授業成果に関する研究	筑波大学学校教育論集，37，37-47
14	佐藤善人・田口智洋	2015	中学校における長距離走に関する研究 ―「達成」の喜びを味わうためのペース走の実践―	ランニング学研究，27（1），1-12
15	高嶋香苗・渡辺輝也・周東和好	2017	競走相手との駆け引きを学ぶ長距離走の新しい学習指導過程の提案	体育学研究，62（1），49-70
16	佐藤善人	2018	義務教育期におけるランニングのカリキュラムに関する研究 ―小学校と中学校の接続に注目して―	ランニング学研究，29（2），143-156
17	齊藤一彦・松本佑介・濱本想子	2019	競走を主題化した長距離走授業の成果と課題―中学生の長距離走に対する愛好的態度の変容に着目して―	学校教育実践学研究，25，85-92
18	有馬一彦・笠次良爾・立正伸ほか2名	2020	長距離走授業における運動強度に対する気づきを促す試み―アクティブトラッカー（運動活動量計）を用いて―	次世代教員養成センター研究紀要，6，211-216
19	松本佑介・齊藤一彦・白石智也	2020	中学校体育における「駆け引き型長距離走」が生徒の態度に及ぼす効果の検討 ―長距離走を苦手とする生徒に着目して―	広島大学大学院人間社会科学研究科紀要 教育学研究，（1），128-135
20	田口康之	2020	学習指導要領移行期間を踏まえた中学校の長距離走の授業づくり	国士舘大学体育研究所報，38，111-114

表３ 「意欲」に関する先行研究の成果の分類結果

大グループ	小グループ	具体例
学習内容・方法（9）	走法の学習の導入（2）	積極的に走法の学習に取り組んだ様子がうかがえ，走法を課題としたことは，これまで以上に意欲的に長距離走に取り組むことにつながった．（岡本ほか，2011，p.126）
	ビデオによる走法に関する自己分析の実施（2）	ビデオや写真による姿勢作りを中心とした走法についての学習やビデオで自分の走りをみて比べたことは，生徒にとって新鮮であったようで，長距離走に取り組む課題意識を高めることができたと思う．（岡本ほか，2012，p.277）
	LSD トレーニングの導入（1）	「LSD トレーニングを家の近くのグラウンドでやってみようと思いました」などと回答した生徒も数名おり，今回の長距離走の授業実践が，生徒を生涯スポーツ・体育へ導く方策になるではないかと考えられる結果が得られた．（新冨ほか，2010，p.203）
	ビルドアップ走の導入及び心拍数測定の習慣化（1）	苦しいペースではなく一周ごとに無理なく余裕のあるペースを模索する方法，具体的には軽快なジョギング（4 分）から早めのジョギング（2 分）を実施後ダッシュ（1 分）という練習方法を考え，また同時に心拍数を測る習慣づけしたことで意欲的に取り組む生徒が増えた（田口, 2020, p.113）
	ペアによるイーブンペース走の導入（1）	本単元の構成や授業展開の方法は，生徒の長距離走への意欲向上や達成感を味わうといった，情意面への好影響を与えうることが示唆された．（小山，2015，p.43）
	至適脈拍値に関する専門性の高い講義の実施（1）	子どもたちにここまで課題に向かわせた推進力となるものは何であったかを分析したところ，子ども達の実際の声やレポートから見取ると，「至適脈拍値」であった．心肺機能の向上のためのトレーニング効果を上げるには，『「至適脈拍値（140 回～ 160 回／分）」に脈拍が達する運動を５分～ 12 分継続する』ことが条件となる．この部分をより専門性の高い大学教官に講義を受けることができ，子どもたちの課題に対する動機付けとなったのである．「至適脈拍値」が客観的な数値であり，子どもたち自身が簡単に測定できるものであることが，質の高い学びへ導く大きな要因となることが確かめられた．（富川・城後，2005，p.18）
	記録向上の実感（1）	最終の第十一時には十二分を切るまでにタイムが伸びました．A 子自身もやればできることを実感し，自分の限界に挑戦していく喜び，タイムを縮めていくことの喜びを感じていました．（田口，2013，p.63）
教師の働きかけ（4）	走る必要性を感じさせる資料の活用（1）	心に残ると思われる，あるいは，走る必要性を感じると思われる資料を読み聞かせながら，走る意欲を高めるような指導がなされた．（渡辺・植屋，2003，p.192）
	ICT 機器を通じた教師の目（1）	多くの生徒が，自分の力を出し切ろうとしていたため，３周目４周目になると画面はほぼ 90％以上を示す赤タイルがほとんどになった．これは，逆に生徒側からすれば，教員に自分のしんどさを見られていることになるため，意識が高まったのかもしれない．（有馬ほか，2020，p.215）
	記録向上率上位者の掲示（1）	記録がどれだけ伸びたかに関わる上位 30 名も学年の廊下に掲示された．記録の伸びの上位者は，絶対的な記録の上位者とはかなり違う顔ぶれになり，長距離走は遅いけれども記録的に伸びている状況が著しいことから，これまで長距離走が苦手で，不得意であった生徒も，絶対的な速さだけでなく，地道に取り組んで自己記録を少しずつでも更新していくことの大切さを理解させる取り組み，指導になったものと評価される．（渡辺・植屋，2003，p.194）
	他者との競争意識の喚起（1）	運動意欲の「達成意欲」に有意な差がみられたことからも理解できるように，他者との競争という意識が喚起されるより長距離走が持つ機能的特性である自己の中での達成感が生まれたことが要因と推察される．（高田，1998，p.92）
仲間との関わり合い（1）		仲間が応援してくれるから頑張れます．タイムを一秒でも縮めようと必死になって周回数を数えたり，励ましの応援をしたりする仲間の存在があるからこそ，自分の限界に挑戦できると言えるのです．（田口，2013，p.60）

表４　「成果」に関する先行研究の成果の分類結果

大グループ	小グループ	具体例
学習内容・方法（7）	レースの繰り返し（2）	レースを繰り返す中で，レース中盤まで体力を温存したり，スパートをかけるために位置取りを工夫したり，競走相手の出方を見ながらスパートをかけたりするなどの駆け引きが学習者による試行錯誤を通して発生した．（高嶋ほか，2017，p.63）
	自己評価や相互評価の導入（1）	自己評価や相互評価を工夫して取り入れることにより，生徒相互の交流を深めながら，一人一人の課題が明確になり，自己の能力にあった課題を設定する力が身に付き，（渡辺・植屋，2003，p.188）
	運動処方の考え方の導入（1）	運動処方の考え方を長距離走の中に取り入れることは，自己の抱える健康に関する課題を解決するための方法を理解するという点において有効であったと思われる．（渡辺・植屋，2013，p.191）
	走法の学習の導入（1）	これまで，走るときに姿勢について考えたり意識したことはほとんどなかったのか走法の学習をしたこともあり「姿勢」についての課題意識はとても高く数も多かった．（岡本ほか，2012，p.277）
	理論的内容の提示（1）	自分自身並びにペアやグループのメンバー同士で学習しながら進める授業の方式に慣れたところで，４時間目にペースランニングに関する理論的な内容を示すことにした．生徒たちは思いのほか，セカンドウインドという現象の存在に興味づけられたようであった．（原ほか，2008，p.135）
	適切な目標ペースの設定（1）	1500m 走では，設定した目標タイムで走るレースと自分に合った一定のペースで 1500m 走を行うことでペースの大切さを理解させることができた．（田口，2020，p.113）
観察及び分析（4）	見学時における仲間の走りの観察（1）	私は見学をしていて，走ることがあまりなかったけど，みんなが走るところを見てとても勉強になりました．だからこれからは何も考えずに走るだけではなく，自分自身の体の状態，走るコツなどの，頭を使って考えて行きたいと思いました．（原ほか，2008，p.137）[注2]
	他者のレース展開の観察（1）	この被験者 j の試みは周囲でその様子を見ていた被験者の間で話題となっていた．（高嶋ほか，2017，p.62）
	VTR を用いた走りの分析（1）	VTR 視聴は，グループの仲間にとっては走者の走りをもう一度じっくりと観察してより正確で具体的なアドバイスを考えるための手がかりとなり，走者にとっては，これまで友人から得ていたアドバイスと自分の走りを客観的に比較検証する機会になったようであった．（澤崎, 2011, p.88）
	走法に関するチェックポイントの提示（1）	バイオメカニクス的手法を取り入れ，走フォームのチェックポイントをさらに具体的に意識して，目標として取り組めるような指導がなされた．生徒は各自の走フォームを客観的に観察したことがなく，新鮮な目で眺めることができた（渡辺・植屋，2003，p.192）
身体のコントロールに対する意識の涵養（1）		走法にとどまらず，自分の体のコントロールに関することにも思考が向くようになっており，特に本研究のテーマである体の変容に対する認識と論理的思考力を育てることに関わっての成果がみてとれる．（岡本ほか，2011，p.127）

表５　「協働」に関する先行研究の成果の分類結果

大グループ	小グループ	具体例
グループ学習（4）	駅伝の導入（2）	駅伝大会に向けてのチームの話し合い活動，駅伝大会での励まし合いを通して，自分だけではなく，仲間のことに気づき，教え合い助け合い，仲間を大切にする意識を高めることができた結果が確認される．（渡辺・植屋，2003，p.191）
	グループ対抗で設定タイムとの誤差を競う形式の導入（1）	設定タイム型のランキング戦に変わると，グループの設定タイムという目標に向かってどう取り組んでいくのかという共通の課題が生まれ，スピード型のランキング戦と全く同じメンバー構成であってもグループ内で話し合いや，協力する姿が見られた．（澤﨑，2013，pp.140-141）
	チーム選手権におけるチーム内の話し合いの実施（1）	下位群の「協働」の因子得点が向上した主な要因には，チーム選手権におけるチーム内の話し合いが挙げられる．（松本ほか，2020，p.132）
ペア学習（3）	ペア学習の導入（2）	ペア学習を用いることで，自分のタイムだけでなく，ペアのタイムも大切にしていくことができます．（田口，2013，p.60）
	ペア学習におけるラップ表の活用（1）	ペアがラップ表を確認しながら「このペースだと，何分何秒になるよ」と声をかけ合うことにも活用させました．（田口，2013，p.61）
応援に対する教師の価値付け（1）		反省会では，自己ベストの更新を讃えたり，よい走りをしていた生徒や一生懸命走っている仲間に声をかけていた生徒を教師が価値付けたりしました．（田口，2013，p.62）
タブレットによる運動中の脈拍数の表示（1）		全員の現在の脈拍がタブレットの画面に表示される．（中略）その生徒に合ったアドバイスを送ることができる．負荷の高い生徒には，「落ち着いて！呼吸をていねいに！」であったり，負荷の比較的低い生徒には「もう少し行ける！前を追いかけて！」などといった具合に個々の運動負荷に合わせた声かけやアドバイスが可能になる．（有馬ほか，2020，p.215）

表６　「好感」に関する先行研究の成果の分類結果

大グループ	小グループ	具体例
学習指導要領における長距離走の目標（8）	記録・体力の向上及び競走の楽しさの実感（4）	この結果は，愛好的態度育成を目指した長距離走実践における成果と言えるだろう．また，その要因としては主に生徒らが競走の楽しさを実感したことや単元前後における記録の向上が考えられる．（齊藤ほか，2019，p.91）
	競走の楽しさの実感（3）	もともと長距離走に対して好印象を持っていたことに加えて，今回の学習実験でも「競走相手との駆け引き」を楽しむことができたため，今回の学習実験を「楽しかった」と回答したものと考えられる．（高嶋ほか，2017，p.64）
	記録の向上を伴わない成果（1）	期待通りの記録向上が見られなくても，多くの生徒が，長距離走単元に，楽しみながら，各自の成果を得られるよう取り組むことができたといえよう．（小山，2015，p.44）
学習内容・方法（5）	制限区間の設定（1）	これらの意見は，制限区間を設けたことで，被験者が決められた距離を淡々と走るのではなくて，自ら戦術を工夫し，それを用いた駆け引きを楽しむことができたことを示していると考えられる．（高嶋ほか，2017，p.64）
	勝敗の未確定性の保証（1）	下位群の「好感」の因子得点が向上した主な要因には，本授業実践におけるレースでは「勝敗の未確定性」（小田・原，2016，p.53）が担保されており，下位群も「勝ち負けの間のドキドキ」（梅澤，2016，p.37）を楽しむことができたことが挙げられる．（松本ほか，2020，p.132）
	駅伝の導入（1）	ただ単に全力で走るよりも，駅伝大会の中で，自分のため，チームのために全力を出して走ることの方が頑張ることができ，かつ楽しさや充実感を味わうことができると思われる．（渡辺・植屋，2003，p.191）

学習内容・方法（5）	LSD の導入（1）	「長距離走は苦手だったけど，実際にやってみて好きになった」や「楽しく楽に走って体力がつくから好き（LSD の実践）」というように今回の実践における工夫によって，生徒が長距離走に対して好印象を抱くことができた結果と考えられる回答が多く見受けられた．（新冨ほか，2010，p.203）
	ペアによるイーブンペース走の導入（1）	低成績群においても，長距離走やその授業に対する忌避感の改善，記録への満足度向上，苦痛の減少など，肯定的，好感的な態度，情意面での良好な変化が明らかであった．（小磯・小山，2012，p.18）
ペース感覚の獲得（3）	ペース感覚の獲得及び走法への意識の涵養（1）	４回目では３回目に比べて 24 秒の記録が更新されている．このあたりからペースもつかめてきたり，今回のテーマである走法についても次第に考えられるようになり，長距離走の楽しさを感じるようになっていた．（岡本ほか，2011，pp.124-125）
	自身の体の変化の実感（1）	毎回の授業記録シート内の感想欄には，「ペース走をしたが，ペースがばらばらだったので，これからは一定にできるように頑張りたい」「だいぶ一定ペースで走れるようになってきた」「前よりも記録が良くなって嬉しかった」「脈拍数が 200 近くになっていて，全力を出せていることがわかった」など，前よりもできるようになったという自分の体の変化を実感した記述が多数みられた．（山本ほか，2012，p.115）
	ペース走及び記録測定の交互実施（1）	生徒は自身の目標記録に適したペースがペース走によりわかり，2000m 走の記録が徐々に速くなり，このねらい１とねらい２の学習が交互に繰り返されることにより，長距離走に対する好意的な態度が形成されたと考えられる．（佐藤・田口，2015，p.11）
達成感の実感（2）	達成感及び成就感の実感（1）	長い距離を走り抜くことによって，我慢強さや忍耐力など強い意志を育み，達成感や成就感を味わうことのできる（渡辺・植屋，2003，p.188）
	解放感及び達成感の実感（1）	前回の調査に比べて大きく数が伸びて今回最も多かったのが「楽しかった，よかった，充実していた」の項目である．生徒たちは，長距離走に正面から取り組み「わかったこと，できたこと，学んだこと」に見られるような様々な内面的な価値をそこに見出し，苦しい中をがんばり通したことからの解放感や記録が伸びたりした後の達成感などを実感できたからであろう．（岡本ほか，2011，pp.125-126）
統制感の向上（1）		長距離走に対する好意的な感想が多く見られた．これらの感想は，今回の授業の工夫による統制感の向上が長距離走を好意的に感じさせ，生涯スポーツにつながっていく可能性を裏付けるものと考える．（山本ほか，2012，p.115）

表７　先行研究における「不快」に関する態度を生じさせなかった要因の分類結果

大グループ	小グループ	具体例
仲間との関わり合い（2）	生徒同士の対等な関係性の保証（1）	体育の授業のように技能の習熟度や体力に大きな違いがあっても，コミュニティの中の関係が序列化されることなく，対等な関係であることを保証することで一人一人の学びが確かなものになっていくのではないかと考える．（澤崎，2013，p.141）
	仲間との連帯感（1）	自分のタイムと同じくらい大切にして声をかけていくことで，ペアが自己ベストを出したときは，自分のときと同じくらいの喜びを味わえます．（田口，2013，p.61）

たらした要因として，学習内容・方法，教師の働きかけ，仲間との関わり合い，の３点が考えられた．まず，先行研究における授業では，生徒の意欲を引き出すために，ただ単に画一的な授業を展開するのではなく，走法の学習やLSDトレーニング，ペアによるイーブンペース走の導入などの工夫が取り入れられていた．また，生徒が走る意義を見出したり，他者との相対的な速さではなく，自己の記録の向上に目を向けたりすることができるようにする，教師の働きかけの重要性が窺えた．加えて，仲間からの応援が，生徒の長距離走に対する意欲に影響を及ぼすことも示唆されていた．

そもそも陸上競技の授業では，運動能力の差が数値で表れることから，運動能力の低い生徒が苦手意識を持ちやすい（陳，2021）．その中でも長距離走は，苦しさを伴うため，運動自体が楽しいものではない（宮﨑，2010）と捉える生徒が多いと思われる．そのため，最初の段階は，ある程度の距離を走らせるといった，ある意味で強制が必要なこと（鈴木，2016）を念頭に置きつつも，学習内容・方法の工夫，教師の意図的な働きかけ，仲間同士で応援し合う雰囲気の醸成によって，生徒の長距離走に対する意欲的な取り組みを促進することが可能であると考えられる．

4.2.「成果」に関わる成果の要因

「成果」の視点，すなわち，生徒が長距離走を学習したうえで得られることに関する成果をもたらした要因として，学習内容・方法，観察及び分析，身体のコントロールに対する意識の涵養，の３点が考えられた．まず，学習内容・方法について，「成果」における具体例は，「意欲」における具体例とは，その内容が異なっていた．「成果」に関連した成果をもたらした授業では，生徒が授業の中で学習した内容を，自身の走りに生かすことができたり，振り返ったりすることができるような機会が設定されていた．また，自己や仲間の走りを観察・分析すること，並びに，徐々に自身の走法やペースをコントロールできるようになっていくことの重要性が示唆されていた．

近藤（2018）は，近年の体育授業について，単元前半に基礎的な知識を学習し，単元後半に知識を活用して思考・判断をしていく，といった課題解決的な学習を志向した授業が多くみられると報告している．また，松田（2019）は，知識を得たり，技能を身に付けたりするだけでは，浅い学びにとどまると述べている．以上を踏まえると，長距離走授業において，学んだ内容を生かしたり，自己や仲間の走りを観察・分析したりする過程を通して，生徒が長距離走について，わかり・できるようになることが重要であると考えられる．

4.3.「協働」に関わる成果の要因

生徒が長距離走やその授業における仲間との協力や学び合い，それを築くことができる人間関係を示す「協働」に関する成果をもたらした要因として，グループ学習，ペア学習，応援に対する教師の価値付け，タブレットによる運動中の脈拍数の表示，の４点が考えられた．駅伝やグループ対抗戦，ペア同士でペースを確認し合う学習などを導入したり，生徒同士が応援し合う雰囲気を教師が価値付けたり，ICT機器を活用したりすることで，尾縣（2016）が指摘するような従来の長距離走授業では難しかった，生徒同士の関わり合いを促すことが可能になると考えられる．ただし，ただ単に生徒同士を関わらせるだけでは，授業の目標を達成することは難しく（土田，2008），学習に対して消極的な生徒が生まれる場合もある（石崎ほか，2021）．したがって，「〈対象〉と〈自己〉を喪失した〈他者〉とのかかわりに特化した話し合い」（岡野，2018，p.9）にならないよう，何について話し合うのかを明確にし，また，それに対する自己の考えを整理させてから話し合いを行わせるように留意する必要があると考えられる．

4.4.「好感」に関わる成果の要因

生徒が長距離走やその授業に関して肯定的でよい印象を抱いていることを示す「好感」に関する成果をもたらした要因として，学習指導要領にお

ける長距離走の目標，学習内容・方法，ペース感覚の獲得，達成感の実感，統制感の向上，の５点が考えられた．小磯ほか（2018）が，長距離走の５つの態度の関係性について，「好感が元で，意欲と成果はそこから生まれ，協働も生まれる」（p.17）と述べていることからも，「好感」に関わる態度の重要性が窺える．そのため，記録の向上や競走の楽しさ，あるいは達成感を味わわせることができるよう，生徒にペース感覚を身に付けさせたり，場の設定やルールを工夫したりすることが重要であると考えられる．

また，小磯ほか（2017）は，長距離走において，単に記録を計測するからよくない，競走するから辛いだけ，のんびり走れば苦しくないから好意的になる，というような単純な話ではないことを指摘している．したがって，学習指導要領において示されている記録向上や競走の楽しさを生徒に味わわせるという目標の達成に資する工夫を行っていくことが望ましいと考えられる．

4.5. 「不快」に関する態度を生じさせなかった要因

「不快」に関する態度を生じさせなかった要因として，仲間との関わり合いが考えられた．澤崎（2016）は，長距離走が苦手な生徒の辛さを軽減するために，駅伝のような集団で勝敗を競う授業を行ったが，生徒の「自分のせいで負けた」という思いまで払拭することができなかったとしている．このような場面において，生徒同士の対等な関係性が保証されていたり，仲間との連帯感が築かれていたりすることで，長距離走が苦手な生徒は，ネガティブな思いを抱くことが少なくなると思われる．

Ⅴ．総合考察

以上，小磯ほか（2018）の５つの態度の視点から，体育教師が長距離走嫌いの生徒の減少に寄与できる授業を実施するために，先行研究において実施された長距離走授業の成果及びその成果の要因を整理してきた．これらの知見を踏まえ，ここでは，どのように長距離走授業が実践されていくべきかについて，生徒の長距離走に対する態度の視点から，その具体的な単元の在り方を示す．

まず，本研究の調査内容として援用した小磯ほか（2018）においては，長距離走に対する生徒の態度は，「好感」が基となり，ほかの態度へ派生すると述べられている．このことを踏まえると，「好感」に関する成果を志向した授業を中核に単元を構成することが肝要であると考えられる．具体的には，「好感」に関わる成果として，学習指導要領における長距離走の目標，ペース感覚の獲得，達成感の実感などの重要性が示唆されたことに着目して，単元を通して，これらを達成することができるよう，学習内容・方法を工夫することが必要であろう．他方で，長距離走に対する態度は，好きや楽しいといった「好感」に関する一面的なものではなく，「意欲」，「成果」，「協働」，「不快」に関する態度も含めた多面的なものである（小磯ほか，2018）．このことに鑑み，単元の序盤では，「意欲」の成果を志向した授業を展開することが大切であると考えられる．なぜなら，長距離走を実施する前，生徒は消極的な態度になり（佐藤，2018），とりわけ，長距離走が得意でなかったり，目的意識が明確でなかったりする生徒は，授業に主体的に取り組むことが難しい（渡辺・植屋，2003）からである．そのため，単元序盤において，走る意義に関する説明や目標達成への動機づけといった教師の意図的な働きかけが，重要な役割を担うであろう．そして，単元の中盤から終盤では，学んだ内容を生かしたり，自己や仲間の走りを観察・分析したりする過程を通して，生徒同士の肯定的な関わり合いを促し，「成果」や「協働」に関する態度を育成しつつ，「不快」な態度を生じさせない授業を展開することで，生徒の長距離走に対する態度を育成することができると推察される（図１）．

なお，この単元の在り方は，本研究で得られた結果から示した一事例である．鈴木（2021）が，「教師は他者が作成したカリキュラムのユーザーではなく，自身の勤務する学校種，地域の実態，児童

図１　生徒の長距離走に対する態度を育成する単元の在り方

生徒の実態等を鑑みてカリキュラムを作成するカリキュラムメーカ―である」（p.42）と述べていることを鑑みると，各体育教師が，担当する生徒の長距離走に対する態度を踏まえた上で，創意工夫して長距離走授業を実践していくことが重要であると考えられる．

Ⅵ．本研究のまとめ及び課題

本研究の目的は，長距離走授業に関する先行研究のレビューによって，生徒の長距離走に対する態度の視点から，これまでに蓄積されてきた成果及びその成果の要因を整理し，体育教師が，長距離走嫌いの生徒の減少に貢献し得る授業を実践するための一資料とすることであった．その結果，以下の５点が明らかとなった．

１．「意欲」に関わる成果の要因には，走法の学習やLSDトレーニングなどの工夫された学習内容・方法，教師の働きかけ，仲間との関わり合い，が考えられた．

２．「成果」に関わる成果の要因には，学習した内容を自己の走りに生かす機会の設定などの学習内容・方法，自己や仲間の走りの観察及び分析，身体のコントロールに対する意識の涵養，が考えられた．

３．「協働」に関わる成果の要因には，駅伝やペアでペースを測定し合うなどのグループ学習・ペア学習，応援に対する教師の価値付け，タブレットによる運動中の脈拍数の表示，が考えられた．

４．「好感」に関わる成果の要因には，学習指導要領における長距離走の目標の達成，「意欲」，「協働」で挙げられたような学習内容･方法，ペース感覚の獲得，達成感の実感，統制感の向上，が考えられた．

５．「不快」に関する態度を生じさせなかった要因には，仲間との肯定的な関わり合いが考えられた．

一方，本研究では，先行研究の検索において用いたデータベース及びキーワードが限定的であるため，検索されなかったものが存在する可能性が高い．また，本研究においては，先行研究で実施された長距離走授業の成果とその成果の要因に焦

点を当てたため，課題及びその改善策について整理することができなかった．これらの点は，今後の課題としたい．

小磯ほか（2018）は，長距離走嫌いの問題について，「やはりただ走らせるだけ，授業実践だけでは事態は好転しない．持久走・長距離走の位置付け，学習内容や指導方法，成果など様々な検討が必要であろう」（p.18）と述べている．学校現場において，本研究で得た知見が活用され，長距離走嫌いの生徒が減少するような授業実践が広がっていくことを期待したい．

注

1．先行研究における長距離走授業の成果と，生徒の長距離走に対する態度を構成する一因子としての「成果」を区別するため，前者を括弧なしの成果，後者を括弧付きの「成果」と表記することとした．

2．単元終了後における，生徒の感想文を掲載している箇所の抜粋である．

文献

有馬一彦・笠次良爾・立正伸・森本弘一・佐藤朗（2020）長距離走授業における運動強度に対する気づきを促す試み―アクティブトラッカー（運動活動量計）を用いて―．次世代教員養成センター研究紀要，6：211-216.

陳洋明（2021）陸上運動［競技］の教材づくり・授業づくり．岡出美則・友添秀則・岩田靖編著，体育科教育学入門［三訂版］．大修館書店：東京，pp.183-192.

Green, K. (2014) Mission impossible? Reflecting upon the relationship between physical education, youth sport and lifelong participation. Sport, Education and Society, 19(4): 357-375.

原通範・吉田恵介・谷興治・吉田真理（2008）ペースランニングにおける授業実践の検討―初めてのペースランニング実践を対象として―．和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要，18：131-139.

石崎寿和・橋本忠和・小松一保（2021）チーム学習による小学校体育科の授業づくりについての一考察：第３学年ゴール型ゲーム「タグラグビー」を事例に．北海道教育大学紀要 教育科学編，72（1）：613-628.

川喜田二郎（1970）続・発想法―KJ 法の展開と応用―．中公新書：東京.

小磯透・小山浩（2012）中学校長距離走授業におけるイーブンペース走学習の成果．発育発達研究，（55）：11-22.

小磯透・西嶋尚彦・岡出美則・鍋倉賢治（2017）体育における持久走・長距離走に対する小中高生の態度．ランニング学研究，29（1）：9-26.

小磯透・岡出美則・西嶋尚彦（2018）小中高生の体育における持久走と長距離走の態度の因子構造とその変化．発育発達研究，79：1-24.

近藤智靖（2018）体育（実技）で「知識」の習得が求められる理由．体育科教育，66（8）：30-33.

小山浩（2015）中学校保健体育「長距離走単元」の授業成果に関する研究．筑波大学学校教育論集，37：37-47.

牧野功樹（2020）中小企業の管理会計研究―システマティック・レビューによる統合の試み―．管理会計学，28（1）：71-95.

松田恵示（2019）体育における「深い学び」とは？．体育科教育，67（4）：9.

松本佑介・齊藤一彦・白石智也（2020）中学校体育における「駆け引き型長距離走」が生徒の態度に及ぼす効果の検討―長距離走を苦手とする生徒に着目して―．広島大学大学院人間社会科学研究科紀要 教育学研究，（1）：128-135.

宮崎明世（2010）持久走・長距離走の教材史に学ぶ．体育科教育，58（13）：23-27.

文部科学省（2018）中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 保健体育編．東山書房：京都.

文部科学省（2019）高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 保健体育編 体育編．東山書房：京都.

小田成一・原祐一（2016）グッドルーザーを学ぶ. 体育科教育，64（2）：52-55.

尾縣貢（2016）生涯スポーツにつなぐ持久走・長距離走の未来図. 体育科教育，64（1）：14-17.

岡本昌規・合田大輔・高田光代・藤本隆弘・三宅理子・三宅幸信・東川安雄・岩田昌太郎（2011）心と体の変容に対する認識と論理的思考力を育てる授業―3000mペース走をとおして―. 学部・附属共同研究紀要，（39）：123-128.

岡本昌規・合田大輔・高田光代・藤本隆弘・三宅理子・三宅幸信（2012）走法（ランニングフォーム）の学習を取り入れた長距離走の授業―3000mペース走をとおして―. 中等教育研究紀要／広島大学附属福山中・高等学校，52：269-278.

岡野昇（2018）対象的実践の協同としての学び. 体育科教育，66（11）：9.

Randolph, J. (2009) A guide to writing the dissertation literature review. Practical Assessment, Research, and Evaluation, 14(14): 1-13.

齊藤一彦・松本佑介・濱本想子（2019）競走を主題化した長距離走授業の成果と課題―中学生の長距離走に対する愛好的態度の変容に着目して―. 学校教育実践学研究，25：85-92.

佐藤善人（2018）義務教育期におけるランニングのカリキュラムに関する研究―小学校と中学校の接続に注目して―. ランニング学研究, 29(2)：143-156.

佐藤善人・藤田勉（2009）持久走・長距離走に対する態度に関する研究―小学生と中学生の比較を中心にして―. 岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要，9：241-248.

佐藤善人・田口智洋（2015）中学校における長距離走に関する研究―「達成」の喜びを味わうためのペース走の実践―. ランニング学研究，27（1）：1-12.

澤崎弘英（2011）自分にあった効率的なフォームを協働で探る長距離走授業の検討. 福井大学教育実践研究，36：85-89.

澤崎弘英（2013）グループの仲間と協働で取り組み，自分の学びにつなげる―団体戦で取り組む「長距離走」の授業（第2学年）―. 福井大学教育地域科学部附属中学校 研究紀要，41：135-141.

澤崎弘英（2016）集団的達成を味わうパシュート型長距離走の授業づくり. 体育科教育, 64（1）：40-44.

品田龍吉（2010）持久走と長距離走をめぐる今日的課題. 体育科教育，58（13）：10-13.

新冨康平・中田富士男・小原達朗・木下信義・呉屋博（2010）運動有能感を高める体育の授業の工夫―長距離走の授業実践―. 教育実践総合センター紀要，（9）：197-206.

鈴木秀人（2016）なぜ，「持久走」は生涯スポーツにつながらないのか. 体育科教育，64（1）：10-13.

鈴木聡（2021）体育教師としての成長と教師教育. 岡出美則・友添秀則・岩田靖編著，体育科教育学入門［三訂版］. 大修館書店：東京，pp.40-49.

田口智洋（2013）ペア学習による長距離走の実践―限界に挑戦し，仲間と共に高め合える集団を目指して―. 人間教育 ふぞくの歩み，54：60-63.

田口康之（2020）学習指導要領移行期間を踏まえた中学校の長距離走の授業づくり. 国士舘大学体育研究所報，38：111-114.

高田俊也・荒井貴美人・船引英光・芦田光巨・三宅一・桜木浩二・太田吉彦・池田輝子（1998）意欲的に取り組める長距離走実践の検討. 実技教育研究，12：87-99.

高嶋香苗・渡辺輝也・周東和好（2017）競走相手との駆け引きを学ぶ長距離走の新しい学習指導過程の提案. 体育学研究，62（1）：49-70.

田中麻紗子・市川伸一（2011）オリジナリティのある文献レビューに向けて―大学院の「講演者になるゼミ」の実践から―. 東京大学大学院教育学研究科紀要，51：203-215.

富川浩・城後豊（2005）「長距離走」における大

学と中学校の連携の実践．北海道教育大学紀要　教育科学編，55（2）：13-18.
土田了輔（2008）体育の学習集団編成に関する研究．上越教育大学研究紀要，27：217-224.
梅澤秋久（2016）競争が教育的条件を持つ条件．体育科教育，64（2）：36-39.
渡辺保志・植屋清見（2003）生きる力を育む体育学習―中学校における長距離走の授業実践から―．山梨大学教育人間学部紀要，5（2）：187-196.
山本秦明・中垣内真樹・新冨康平（2012）中学体育授業における生涯スポーツを指向した長距離走指導方法の工夫―統制感を高めることを目指して―．環太平洋大学研究紀要，5：111-116.

広島体育学研究　48：15 ～ 26，2022

〔研究資料〕

中国における学校健康教育の歴史的変遷

趙　　月　輝 *
齊　藤　一　彦 **
山　平　芳　美 ***
藤　島　　廉 ****

Historical Changes of School Health Education in China

Yuehui ZHAO
(Graduate School of Education, Hiroshima University)
Kazuhiko SAITO
(Hiroshima University)
Yoshimi YAMAHIRA
(Hiroshima City University)
Ren FUJISHIMA
(Graduate School of Humanities and Social Sciences, Hiroshima University)

Abstract

In China, health education has been emphasized for a long time. In this context, school health education has become the core of health education. To clarify how school health education in China has been established and from what research perspective the status of school health education in China should be examined, it is essential to examine the actual situation and trends regarding school health education in China. In this study, we summarized school health education in China, clarified the characteristics and development of school health education in China, and identified issues that need to be studied and areas that are expected to develop in the future. In this study, literature, laws and regulations, and books in the field of school health education and school hygiene education in China were searched on CNKI, a Chinese article search site. The selected 25 articles were used to organize the contents of the characteristics and development of school health education in China. As a result, since the beginning of the 20th century, school health education in China has developed through four stages: the dawn stage, the development stage, the decline stage, and the revival stage, while mixing hygiene education and health education, and finally arrived at the current "Physical Education and Health," which is a fusion of school health education and school physical education. In the future, it is necessary to accumulate research on the principles of school health education, theories of school health education methods, and theories related to school health education.

* 広島大学大学院教育学研究科，** 広島大学
*** 広島市立大学，**** 広島大学大学院人間社会科学研究科

Ⅰ．緒言

1948年に設置された世界保健機関（World Health Organization，以下，「WHO」）は，「健康とは身体的，精神的及び社会的に安全に安寧である状態であって，単に病気でないとか，病弱でないとかいうに止まるものではない」（野村，2012，p.2）との考え方を提示した．また，学校教育に対して，WHO（1997）は「全ての学校であらゆる段階の子供たちに非常に重要な健康とライフスキルを教えなければならない」（p.12）と提言した．その後，世界各地でこの考え方に基づく諸政策が具現化されつつあり，例えば，1991年に「中華人民共和国未成年保護法」（中華人民共和国第７回全国人民代表大会常務委員会，1991）が公布され，学校は，未成年児童・生徒の心身の発達の特性に応じて，社会生活指導，精神保健相談，思春期教育，生命教育を行うべきであるという考えが示された．さらに，この規定は，2006年，2012年及び2020年の３回の改正を経て，現在もなお残っている（中華人民共和国第10回全国人民代表大会常務委員会，2006；中華人民共和国第11回全国人民代表大会常務委員会，2012；中華人民共和国第13回全国人民代表大会常務委員会，2020）．これらの法律の充実に踏まえ，中国では，元国家教育委員会と中華人民共和国衛生部（1992）によって，小学校・中学校・高等学校健康教育基本要求が発布された．さらに，小学校から高等学校において，学校健康教育が必修の内容として「体育と健康」課程標準に導入された（趙，2019）．また，近年，児童・生徒は健康教育を重点的に学ぶことが求められ，学校健康教育は健康教育の核となっている（範・黄，2014）．以上のように，「中華人民共和国未成年保護法」（中華人民共和国第７回全国人民代表大会常務委員会，1991）及び範・黄（2014）や趙（2019）の先行研究を踏まえると，中国において，学校健康教育は重視されているといえよう．

中国では，衛生教育と健康教育，学校衛生教育と学校健康教育とこれまで様々な類似の用語が活用されてきた．ここでは中国における衛生教育と健康教育について整理する．端（1933）は，衛生教育を，①公衆衛生従事者の育成，②民衆の衛生指導，③学校衛生教育，の３つの領域に大別した．時代の変遷により，近年では，衛生教育が徐々に健康教育に変化し，歴史を遡る論文にしか使われなくなった．一方，周（1937）は，健康教育を，①公衆健康教育，②健康教育の管理者の育成，③学校健康教育の３つの領域に大別した．このように，中国において，衛生教育と健康教育は，現在も混在したままであるといえよう．健康知識の普及，健康活動の促進，疾病の予防など，本質的には同じであると考えることができるが，中国の民国時代前後では衛生教育が多用されていた．その後，健康教育が中国国内において学校健康教育として徐々に受け入れられ，普及していったとされる（範・黄，2014）．

また，中国における学校衛生教育と学校健康教育について整理する．学校衛生教育は衛生教育の一部の内容として位置付けられ，学校における衛生管理や児童・生徒への衛生指導とされる（端，1993）．一方，中国の権威ある研究機関が発行している「教育教学研究」に掲載された李･周（2012）によると，中国における学校健康教育とは教室での授業や健康教育活動を通じて，児童・生徒に一般的な病気の予防や治療，健康管理に関する知識を身につけさせ，生徒のセルフケア意識を高め，科学的・文化的・健康的な生活習慣や行動習慣を身につけさせることであると整理している．これより，学校健康教育は学校における児童・生徒を対象とした健康教育であるといえよう．

中国における衛生教育と健康教育，学校衛生教育と学校健康教育の整理を踏まえ，本質的にこれらは同じと考えられるため，本論文では，衛生教育も含めて「健康教育」，学校衛生教育も含めて「学校健康教育」と統一して取り扱う．

ところで，中国において，学校健康教育が重視されている今日，学校健康教育がいつ頃から形成され発展していったのか，あるいは定着していったのか，中国における学校健康教育の歴史的変遷

についてまとめられた先行研究は３編と限定的である（安・鄭，2008；範・黄，2014；張ほか，2009）．具体的に，範・黄（2014）は「中国における健康教育のトレーサビリティー」で中国における学校健康教育の歴史的脈絡を示し，学校体育の指導に学校健康教育の指導が導入された経緯，「体育」教科から「体育と健康」教科への変遷，学校体育に学校健康教育が導入された「体育と健康」の経緯という３つの視点から学校健康教育の歴史的変遷を整理した．安・鄭（2008）は「中国における健康教育・健康増進の現状と開発方針」で中国における健康教育及び健康増進の開発の歴史を踏まえ，健康教育及び健康増進の開発方針を示した．さらに，健康増進に関する法律や規定が具体化されていないという課題，健康教育の評価基準が整備されていない課題，専門機関の設立に関する課題を提示した上で，今後の対策について述べた．張ほか（2009）は「改革開放 30 年の中国における学校衛生・健康教育の発展の成果」で中国が成立した後の健康教育に関する政策の発展や成果をまとめた．また，中国の学校健康教育の発展に貢献した主要な研究者である張国棟の実績について紹介した．しかし，中国における学校健康教育の発展の過程を明確に分類しながら歴史的変遷についてまとめた研究，さらに，中国における学校健康教育の特徴に関する先行研究は管見の限りみられなかった．

中国において，学校健康教育はどのような歴史的変遷を辿ってきたのか，さらに，今後どのような視点に立って中国における学校健康教育を研究していけばよいのか未解明である．それらを明らかにするためには，中国における学校健康教育に関する動向について研究を蓄積していくことが不可欠であろう．

そこで，本研究では中国における学校健康教育の特徴や発展の過程を明らかにし，今後研究すべき課題及び発展が期待される領域を導出することを目的とした．

Ⅱ．方法

研究の方法としては，中国の論文検索サイトである China National Knowledge Infrastructure（以下，「CNKI」）で「健康教育 AND 歴史」，「衛生教育 AND 歴史」をキーワードとして検索を行った（2021 年 4 月 9 日現在）．なお，CNKI には「法律デジタル図書館」が存在し，法律や法令についても検索することが可能である．本研究で対象とする文献及び各法令については，次の①～③の基準にしたがって選定した．

① 中国における学校健康教育の代表的な学会誌である「中国健康教育」，「中国学校衛生」に掲載された学校健康教育歴史的変遷に関する論文であること．

② 中国における学校健康教育の歴史に関する論文や書籍で，他の論文や書籍で多数引用されていること．

③ 中国における国家機関が公布した，学校健康教育に関する法令であること．

本研究で対象となった文献及び各法令や書籍などを選定した結果，CNKI で 273 編が得られた．①の基準を満たした論文が３編，②の基準を満たした論文が８編，③の基準を満たした各法令が 14 編，①～③の計 25 編が選定された．①～③の選定は，第１著者が独立して行い，その後第２著者と第３著者の計３名による検討を重ね，第１著者・第２著者・第３著者の意見の一致により決定した．最終的に選定した 25 編の文献及び各法令や書籍を表１として作成した．さらに，②に対して，CNKI にて引用された回数の対応表を表２で示した．

そして，①～③で対象となった文献及び各法令や書籍の 25 編を用い，中国における学校健康教育の特徴や発展に関する内容の整理を行った．

表１　中国における学校健康教育に関する文献及び各法令や書籍

選定基準	日本語に翻訳した題目（法令名）	著者（発行年）	概要
①	20 世紀前半における学校衛生を題して執筆した著書略述	張丹紅・張蘇萌（2005）	20 世紀前半における中国の学校衛生に関する図書の要約がまとめられた論文である.
	民国時代における我が国の健康教育の普及モデル研究	胡鳳・常松（2011）	民国の健康教育について歴史的に整理された論文である.
	改革開放 30 年の中国における学校衛生・健康教育の発展の成果	張芯・馬軍・余小鳴（2009）	改革開放の 30 年間を対象に学校教育における衛生教育や健康教育について歴史的にまとめられた論文である.
②	中国における健康教育のトレーサビリティー	範才清・黄超文（2014）	中国における健康教育の歴史を整理する論文である.
	健康教育の概念及び特徴	祖光懐（1983）	中国における健康教育の概念整理に関する論文である.
	中国における健康教育・健康増進の現状と開発方針	安力彬･鄭昊（2008）	中国の健康教育に関する現状や開発の方針についてまとめられた論文である.
	清末・中華民国時代の身体検査制度とその実践に関する研究（1902 年から 1949 年）	王瑶華（2020）	清の時代から中華民国の時代における健康教育の歴史に関する論文である.
	明代の健康教育文集	王東勝・黄明豪（2008）	明の時代における健康教育の内容に関連する書籍である.
	公衆衛生概論	胡鴻基（1933）	中国における衛生教育及び歴史についてまとめられた書籍である.
	中国の小中学校の性教育政策の見直し（1984 年～2016 年）について	劉文利･元英（2017）	中国の健康教育でもとりわけ性教育政策に関する論文である.
	学校体育科教育課程改革の歴史的検討と反省	鄭華偉（2007）	中国の「体育と健康」課程標準の改革に関する論文である.
③	中華人民共和国未成年者保護法（1991）	中華人民共和国第７回全国人民代表大会常務委員会（1991）	中国の未成年者を対象として身体的・精神的健康を保護するために，憲法に基づいて制定された法令である.
	中華人民共和国未成年者保護法（2006）	中華人民共和国第 10 回全国人民代表大会常務委員会（2006）	中国の未成年者を対象として身体的・精神的健康を保護するために，憲法に基づいて制定された法令で，2006 年改訂版である.
	中華人民共和国未成年者保護法（2012）	中華人民共和国第 11 回全国人民代表大会常務委員会（2012）	中国の未成年者を対象として身体的・精神的健康を保護するために，憲法に基づいて制定された法令で，2012 年改訂版である.
	中華人民共和国未成年者保護法（2020）	中華人民共和国第 13 回全国人民代表大会常務委員会（2020）	中国の未成年者を対象として身体的・精神的健康を保護するために，憲法に基づいて制定された法令で，2020 年の最新版である.
	中等教育における思春期教育の実施に関する通達	中華人民共和国国家教育委員会（1988）	中等教育段階の生徒を対象とした思春期教育に関する法令である.
	中国共産党中央委員会「初等中等教育における徳育の改革と強化に関する通達」	中国共産党中央委員会（1988）	中国の初等・中等教育段階における道徳を重視した学校教育に関する法令である.

選定基準	日本語に翻訳した題目（法令名）	著者（発行年）	概要
	中華人民共和国におけるエイズ予防・管理のための中間計画 1990 年～1992 年	中華人民共和国国務院（1990）	中国におけるエイズ予防の計画に関する法令である.
	人口・家族計画業務を総合的に強化し，人口問題を総合的に解決することに関する中国共産党国務院決定	中国共産党中央委員会（2006）	中国における人口・家族計画業務に関する法令である.
	中国児童発展計画 2011 年～2015 年	中華人民共和国国務院（2011a）	2011 年から 2015 年までを対象とした，中国における児童の心身の発育発達に関する法令である.
	中国児童発展国家計画大綱 2011 年～2020 年	中華人民共和国国務院（2011b）	2011 年から 2020 年までを対象とした，中国における児童の心身発育発達に関する法令である.
③	健康中国 2030 年計画	中華人民共和国国務院（2016）	2030 年を達成年とした「健康中国」の計画に関する法令である.
	学校衛生工作条例	中華人民共和国国家教育委員会・中華人民共和国衛生部（1990）	中国における学校衛生の作業の規則に関する法令である.
	小学校・中学校・高等学校における健康教育の指導綱要	中華人民共和国教育部（2008a）	中国における小学校から高等学校を対象とした学校健康教育の内容を示す国家の法令である.
	教育部義務教育における実験的カリキュラムの発行に関する通達	中華人民共和国教育部（2001a）	中国における義務教育 9 年間のカリキュラムに関する国家の法令である.

表２　CNKI 検索において多くの引用があった文献と引用回数

引用回数	日本語に翻訳した文献及び書籍名
798 回	中国における学校健康教育のトレーサビリティー
770 回	健康教育の概念及び特徴
93,113 回	中国における健康教育・健康増進の現状と開発方針
78 回	清末・中華民国時代の身体検査制度とその実践に関する研究（1902 年から 1949 年）
293 回	明代の健康教育文集
220,521 回	公衆衛生概論
387 回	中国の小中学校の性教育政策の見直し（1984 年～2016 年）について
1,403 回	学校体育科教育課程改革の歴史的検討と反省

Ⅲ．結果・考察

3.1　中国における学校健康教育の歴史的変遷

中国における学校健康教育の発展はその特徴に応じて，以下の４つの時期に分けられた．

3.1.1　学校健康教育の黎明期（1902年から1928年）

清時代[注1)]の末期，「洋務運動」に影響され，中国では20世紀に入ってから学校健康教育が始まるようになった（張･張, 2005）．この時期では，健康教育は基本的に学校が中心となっており，児童・生徒を対象とし，主に，校医が担当及び教育を実施する状態であった（範･黄, 2014）．1902年，清時代の政府は「欽定中学堂章程」を公布し，学校健康教育に初期的な要件が定められた（葉，2010）．例えば，食堂・浴場・療養室の設置，生徒の身体状況に応じた椅子・机の用意である．このような要件が施策として示された背景には，当時の学校健康教育の中で教育環境の整備が狙いとされていた．続いて1904年に，清時代の政府は「奏定学堂章程」を公布した．そして，日本の学校制度をモデルにして，清時代の政府が発育発達と衛生の内容をカリキュラムに組み込み，学校教育に健康教育の内容を導入し始めた（王・黄，2008）．「奏定学堂章程」の公布により，近代教育の幕開けとなった（範・黄，2014）．

1927年，南京国民政府が成立し，国の復興の一環として，健康教育が重視されることとなった（王，2020）．しかし，1911年の辛亥革命から1928年の中華民国時代の南京国民政府による統一までの間，内戦による混乱は学校健康教育に大きな影響を与えたため，学校健康教育の発展が難しい時期であった（王，2020）．上述した清時代に学校健康教育の内容を導入し始めたことからこの時期は黎明期といえよう．

3.1.2　学校健康教育の発達期（1928年から1937年）

1928年10月30日，南京国民政府令国家衛生部が設立され，全国的に衛生活動がはじまった（胡・常，2011）．一方，当時，国民には健康教育とはどのような教育か認知されておらず，政府は健康教育を普及させるため，衛生告示，プラカード，衛生講演などの方法で健康教育を周知した（胡・常，2011）．また，当時の学者たちは，公衆衛生や健康教育を，学校外における児童・生徒の日常生活の中で教えるべきだと提唱した（胡･常，2011）．そのような中1932年，王庚の「健康教育実施法」が発刊された．「健康教育実施法」には，健康教育を実施する際の要点が詳しく解説されており，健康教育の普及と実施の土台となった（胡･常，2011）．

さらに，中華民国の時代[注2)]では各地の学校教育機関において，健康教育に関する事業が立ち上げられ，委員会も相次いで設立された．1929年，北平市（現在の北京市）が学校衛生委員会を設立し，1931年，南京市が健康教育委員会を設立した（範・黄，2014）．次に，1933年，北平市は小学校･中学校･高等学校健康教育委員会を設立し，学校健康教育を体系的に実施した（張ほか，2009）．1934年，当時の国家教育部は小学校・中学校・高等学校衛生委員会を設立し，衛生委員会が小学校・中学校・高等学校における健康教育実施法案を制定した．続く1935年に，「中国衛生教育社」，1936年に，「中華健康教育学会」と全国的な学会が創立された（範・黄，2014）．前述した学校健康教育に関する学会が相次いで創立されたことから，学校健康教育の発達期といえよう．

3.1.3　学校健康教育の衰退期（1937年から1985年）

中華民国の時代から進められた学校健康教育の発達期は短く，1937年から中華民国は第二次世界大戦に巻き込まれた．学校健康教育のみならず，学校教育の全てが衰退期となった（範・黄，2014）．1945年，第二次世界大戦終戦直後，内戦に入り，1949年，中華人民共和国が成立するまでの間，学校教育は沈滞していた（張ほか，2009）．この時期，学校健康教育は衰退の一途をたどった．

そして，1949年10月1日に中華人民共和国が成立した．1950年に毛沢東（初代中国主席）は

健康第一の教育方針を提示した（範・黄，2014）．しかし，中華人民共和国建国初期には，政治運動が頻発した．例えば，1947 年から 1952 年までの「土地改革運動」，1951 年の反革命運動「三反五反」，1957 年から 1958 年までの「反右派闘争」，1958 年から 1960 年までの「大躍進運動」，1963 年から 1966 年までの「四清運動」，1966 年から 1976 年までの「文化大革命」などがある．これらの運動の中には，最終的に民主主義革命を完成させ，人民を解放するという歴史的な課題を達成するために必要なものもあったが，当時の現状から切り離され，損失をもたらしたものもあった．特に，「四清運動」において，少なくとも 7.7 万人が死亡し，500 万人以上迫害されたと報告されている（楊，2017）．さらに，「文化大革命」は学生の学業を中断させ，教員や研究者は農村や工場で働くことが強要され，軍隊への入隊が強いられた．「文化大革命」の広範で壊滅的な影響の大きさから「破滅の 10 年」と呼ばれていた期間であった．文化大革命の中で，教員や研究者たちは研究及び教育をする機会が奪われ，児童・生徒や学生は教育を受ける機会にも恵まれない状況となったため，学校健康教育も同時に衰退した時期と推察される．上述した教員や研究者たちは研究及び教育をする機会が奪われたことから，この時期は学校健康教育の衰退期といえよう．

3.1.4　学校健康教育の復興期（1985 年以降）

1985 年には中国教育部が中心となり，国家体育委員会，中華人民共和国衛生部，国家民族委員会，国家科学技術委員会，中華人民共和国財政部が共同で全国学生体力研究プロジェクトを組織化し，中華人民共和国建国以来初の全国・多民族学生健康調査を実施した（張ほか，2009）．この調査は，中国全国の小学生・中学生・高校生・大学生を対象に体型，発達状態，体力，健康状態の 4 項目と 24 の指標からなる調査で，初めて全国の児童・生徒・学生の身体や健康に関する基礎データを得るものであった．中国における教育，スポーツ，健康，ナショナリズム，発育発達，医学，優生学，人類学の研究のために，健康教育の実態に関する代表的なデータとなった（張ほか，2009）．

全国・多民族学生健康調査以降，中国政府は学校健康教育を重視してきた（劉・元，2017）．1988 年 8 月，中華人民共和国国家教育委員会（1988）は「中等教育における思春期教育の実施に関する通達」を発表し，中等教育段階における思春期教育の実施要編を規定した．この思春期教育には，学校健康教育に該当する内容の一部が含まれている．続いて，中国共産党中央委員会（1988）は「初等中等教育における徳育の改革強化に関する通達」を発表し，初等・中等教育段階は児童・生徒の身体的成熟度が徐々に高まる時期であること，思春期教育は心身の健康教育と組み合わせて適時に実施すべきであることを強調した．「中等教育における思春期教育の実施に関する通達」と「初等中等教育における徳育の改革強化に関する通達」の機関は異なるものの，両者ともに教育に関する通達を取り扱うこととなっている．その後，中国共産党中央委員会国務院（1990，2011）と中華人民共和国国務院（2011a）は，「中華人民共和国エイズ予防・管理中期計画 1990 年～1992 年」，「人口・家族計画業務を総合的に強化し，人口問題を総合的に解決することに関する中国共産党国務院決定」，「中国児童発展計画 2011 年～2015 年」を公布した．また，「中国児童発展国家計画大綱 2011 年～2020 年」や「健康中国 2030 年計画」など，一連の重要な政策を採択していった（中華人民共和国国務院，2011b；劉・元，2017；中華人民共和国国務院，2016）．特に，「中国児童発展計画 2011 年～2020 年」では，健康教育を義務教育のカリキュラムに組み込むことと明記されており，初等・中等教育における健康教育の実施に制度的な保障が示された（中華人民共和国国務院，2011b）．

さらに，中国教育部・教育委員会は，学校健康教育に関する多くの政策を打ち出した．1990 年 6 月，中華人民共和国国家教育委員会・中華人民共和国衛生部（1990）は「学校衛生業務に関する規則」を発布し，学校は児童・生徒の良好な衛生

習慣の育成を行い，衛生的な環境と教育や学習の衛生状態を改善し，児童・生徒の感染症や一般的な病気の予防と治療を強化する必要があることを明記した．さらに，教育部は 2008 年 12 月に「小学校・中学校・高等学校における健康教育の指導綱要」（以下，「指導綱要」）を公布した．「指導要綱」では，「健康的な行動･生活習慣」，「疾病予防」，「心の健康」，「成長･発達･思春期の健康」，「安全･緊急・危険回避」の５つの分野について，それぞれ健康教育に関連する内容が盛り込まれた（中華人民共和国教育部，2008a；趙，2019；趙ほか，2020）．教育部をはじめとする政府の各省庁は，前述した基準や規則を公布し，学校健康教育の内容を具現化することで，学校健康教育を重視していった．学校健康教育を重視する動きや多くの政策が打ち出されたことから，この時期は学校健康教育の復興期といえよう．

3.2　学校健康教育と学校体育の融合

1996 年，「中国共産党中央委員会国務院の教育改革，「素質教育」の推進を全面的に行う決定」が公布された（中華人民共和国教育部，1999）．項（2006）は，「素質教育」について，「国の教育方針を全面的に貫徹し，国民素質の向上を根本的な趣旨とし，児童・生徒の創造精神と実践能力の育成に力点を置き，『理想あり，道徳あり，規律あり』の徳育，知育，体育の全ての面で発達する社会主義事業の建設者と後継者を育成する教育」（p.43）と述べている．「素質教育」では，学校教育において，健康第一という指導の思想に基づいて，体育科教育を効果的に強化すべきであることが明示された（中華人民共和国教育部，1999;鄭，2007）．「素質教育」の推進は，中国の基礎教育カリキュラム改革の前提条件だといえよう（中華人民共和国教育部，1999）．しかし，学校健康教育は基礎教育課程の枠組みの中で独立した教科とさ

表３　中学校における課程標準の学習内容及び目的

	内容	目標
運動への参与	体育学習と鍛錬への参与	基礎的な運動習慣を形成する
	運動の楽しさと成功体験	基礎的な体育において積極的な態度を形成する
運動の技能	体育知識の学習	体育の試合における結果と課題と問題を分析する
		体育学習とトレーニングの能力を高める
	運動の技能と方法の把握	運動の技能を身につけ実践する
	安全意識の向上と防止の能力	安全に運動の能力を高める
		安全に関する知識を日常生活に適用する
身体の健康	基礎的な保健知識と方法の把握	生活の仕方と健康の関係を理解する
		基礎的な衛生及び病気の予防の知識と方法を把握する
		基本的な青春期の保健知識を把握する
	体力とトレーニング能力の全面的な発達	運動項目の練習において感度，速度，力，心肺能力，トレーニング能力を高める
メンタルヘルスと社会への順応	強靭な意志の育成	断固とした決断力を持つ
	感情コントロールの方法と習得	挫折及び失敗に対して積極的に対応し，安定した気持ちを持つ
	協力意識の醸成	集団としての栄誉感を確立する
	良好なスポーツ道徳心の育成	良好なスポーツ道徳心を形成し，日常生活に反映させる

出典：趙ほか（2020）

れておらず，当時の中国における教育制度や社会的な背景を踏まえ，従来の「体育」課程に学校健康教育の内容が加えられた（中華人民共和国教育部，2001a）．2001 年，教育部では，基礎教育課程の中で「体育と健康」を重要な課程とし，「体育と健康」課程標準[注3)]を公布した（中華人民共和国教育部，2001b）．従来の「体育」課程には主に運動実技及び運動理論で構成されていたが，「体育と健康」課程標準では，人間中心・健康第一の教育理念を定め，「運動への参与」，「運動の技能」，「身体の健康」，「メンタルヘルスと社会への順応」の４つで構成され，その具体的な内容と目標が明示された（中華人民共和国教育部，2008b）．「体育と健康」課程標準の具体的な学習内容や目標を，中学校を例として表３にまとめた．とりわけ，表３の身体の健康やメンタルヘルスと社会への順応から，学校健康教育が加えられたことが理解できる．なお，「体育と健康」課程標準は学校の教科「体育と健康」の内容が決められている．そして，「指導綱要」は学校健康教育すべての内容が規定されている．つまり，「体育と健康」課程標準は，「指導綱要」が規定した学習内容に従わなければならない（中華人民共和国教育部，2008b）．以上を踏まえると，「体育と健康」課程標準と「指導綱要」の発布は，学校健康教育と学校体育の融合を示したといえよう．このように「体育と健康」教科に位置付けられた学校健康教育は中国における学校健康教育の特徴だと考えられる．

3.3 学校健康教育の歴史的変遷を踏まえた研究課題の検討

中華人民共和国国家教育委員会・中華人民共和国衛生部（1990）が発布した「学校衛生業務に関する規則」では，学校に健康教育の授業に取り入れることを求め，学校教育における学校健康教育の位置づけを明確にした．また，2008 年，教育部が公布した「指導要綱」では，学校健康教育を５つの分野に分けて，その内容も詳しく規定された．しかし，王ほか（2020）は学校健康教育の内容が拡充されているにもかかわらず，学校健康教育の実施が不十分であることを指摘した．

その原因及び学術的な研究課題として，以下の３点に着目したい．

まず，学校健康教育の歴史的変遷から，学校健康教育の内容が拡充されていることは明らかになった．しかし，王ほか（2020）の指摘の通り，「体育と健康」課程の担当教員は学校健康教育に対する基本的な理解ができておらず，「体育と健康」課程の担当教員は学校における児童・生徒・学生に対する健康教育と知識教育の関係性を明確にできていなかった．なお，「体育と健康」課程の担当教員は児童・生徒・学生の健康教育を行うことが知識教育につながると捉え，健康教育を行うことが重要だという理解が不可欠だと考えられる．前述の通り，「健康教育」と「衛生教育」という２つの用語が長い間混在して発展してきた（範・黄，2014）．したがって，学校健康教育に対する基本的な概念を明確にすることが必要であろう．

そして，学校健康教育の歴史的変遷を踏まえ，「体育と健康」課程は従来の「体育」課程と学校健康教育が単純に統合されたものではないと考えられる．一方，王（2001）は学校のカリキュラム全体における学校健康教育の位置づけは明確にされておらず，指導内容についても新たな規定が設けられなかったと指摘した．したがって，「指導綱要」や「体育と健康」課程標準においては学校健康教育の目標や内容が定められているものの，現在，具体的な学校健康教育カリキュラムや学校健康教育の教授技術及び学校健康教育の評価システムが不十分であるといえる．さらに，学校健康教育カリキュラム，学校健康教育の教授技術及び学校健康教育の評価などの学校健康教育の授業方法に関する領域における研究の蓄積は喫緊の課題であろう．

最後に，「指導要綱」の５つの分野の内容より，学校健康教育は様々な研究領域との関わりがあるが，教育内容をどこまで展開するのかについては明確に示されなかった．また，表３の「体育と健康」課程標準の内容より，学校健康教育は社会学，

医学，心理学などの関連がみられた（中華人民共和国教育部，2008b；趙ほか，2020）．さらに，王（2001）は，学校健康教育は健康行動，安全教育，体育と健康教育，健康心理学，性教育などの領域との関わりがみられることを報告した．このように学校健康教育と科学的な領域は隣接している（王，2001）．しかし，学校健康教育は隣接諸領域との相互関係において不明瞭なところが多く，これらのことを明確にするため，学校健康教育と隣接する領域の関係性を構築することが必要であろう．

Ⅳ．おわりに

本研究では学校健康教育の特徴や発展の過程を明らかにし，今後研究すべき課題や発展が期待される領域を導出することを目的とした．

中国における学校健康教育は20世紀に入ってから，清時代の末期に登場した黎明期，中華民国の時代から発展した発達期，戦争や政治運動に影響された衰退期，中国政府に重視された復興期の４つの段階を経ていた．その間，衛生教育と健康教育は同時に発展し，そして，現在の学校健康教育と学校体育が融合した「体育と健康」課程に辿り着いたという，歴史的変遷を明らかにすることができた．

また，前述した学校健康教育の概念及び歴史的変遷の整理から，以下の３点の学術領域に関する研究の課題が浮き彫りとなった．

第１に，学校健康教育の原理に関することである．具体的には，学校健康教育に対する基本的な理解及び学校における健康と教育の関係性を整理することが必要である（範・黄，2014；胡・常，2011；王，2001；張ほか，2009）．

第２に，学校健康教育の授業方法に関する領域である．具体的には，学校健康教育カリキュラム，学校健康教育の教授技術及び学校健康教育の評価に関する領域を開発していくことが必要である（胡，1993；林，2012；王，2001；王ほか，2020）．

第３に，学校健康教育と隣接する領域である．具体的には，健康行動，安全教育，体育と健康教育，健康心理学，性教育などの諸領域との関連である．学校健康教育は幅広い領域との関連があるため，学校健康教育とその周辺領域の関連性を踏まえた研究が必要である（劉・元，2017；王ほか，2005；趙ほか，2020）．

本研究では，学校健康教育の歴史的変遷を整理したが，「体育」課程に学校健康教育が加えられた背景及び「体育」課程から「体育と健康」課程への変更に伴う教員養成との関連性に関する課題までは整理できなかった．これらも今後における重要な研究課題であろう．今後中国において，学校健康教育のさらなる発展に向けて，学問分野の横断的かつ包括的な性質を十分に認識するとともに，教育学と医学，心理学，社会学，行動科学などの多くの隣接する領域との相互関係を考慮する必要がある．

＜注＞

１）清時代は1636年から1912年に滅んだ封建的・帝国的な王朝である．

２）中華民国の時代は1912年中国の清時代終わってから，1949中華人民共和国が成立するまでの時代である．

３）中華人民共和国教育部（2001a）（日本の文部科学省のような組織）は「基礎教育課程改革要綱（試行）」を公表し，「素質教育」に応じる新しいカリキュラムを構築することを決定した．同じく2001年，中国の体育に関する指導計画の基準であった「義務教育・体育教学大綱」は廃止され，「体育（１から６年）」課程標準，「体育と健康（７から12年）」課程標準新たに制定された（林，2012）．日本の「保健体育科」という教科は中国において，旧名称は「体育」課程であり，現行名称は「体育と健康」課程という，さらに，日本の「保健体育科指導要領」に類似するものは「体育と健康」課程標準という．

文献

安力彬・鄭昊（2008）中国における健康教育・健康増進の現状と開発方針．現代予防医学，35

(21)：4203-4209.（中国語）
中国共産党中央委員会（1988）中国共産党中央委員会「初等中等教育における徳育の改革と強化に関する通達」. 中華人民共和国国務院広報.（中国語）
中国共産党中央委員会（2006）中華人民共和国国務院. 人口・家族計画業務を総合的に強化し，人口問題を総合的に解決することに関する中国共産党国務院決定.（中国語）
中国衛生教育社（online）https://baike.baidu.com/item/ 中国衛生教育社 /23193315?fr=aladdin /,（参照日 2020 年 11 月 20 日）.（中国語）
中華人民共和国国家教育委員会（1988）中華人民共和国計画生育委員会. 中等教育における思春期教育の実施に関する通達.（中国語）
中華人民共和国国務院（1990）中華人民共和国におけるエイズ予防・管理のための中間計画 1990 年～1992 年. 中華人民共和国国務院広報.（中国語）
中華人民共和国国務院（2011a）中国児童発展計画 2011 年～2015 年. 人民教育出版社：北京.（中国語）
中華人民共和国国務院（2011b）中国児童発展国家計画大綱 2011 年～2020 年. 人民教育出版社：北京.（中国語）
中華人民共和国国務院（2016）健康中国 2030 年計画. 人民教育出版社：北京.（中国語）
中華人民共和国国家教育委員会・中華人民共和国衛生部（1990）学校衛生工作条例.（中国語）
中華人民共和国第 7 回全国人民代表大会常務委員会（1991）中華人民共和国未成年者保護法. 北京.（中国語）
中華人民共和国国家教育委員会・中華人民共和国衛生部（1992）小学校・中学生・高等学 校健康教育基本要求. 中国健康教育，9（7）：9-12.（中国語）
中華人民共和国第 10 回全国人民代表大会常務委員会（2006）中華人民共和国未成年者保護法. 北京.（中国語）
中華人民共和国第 11 回全国人民代表大会常務委員会（2012）中華人民共和国未成年者保護法. 北京.（中国語）
中華人民共和国第 13 回全国人民代表大会常務委員会（2020）中華人民共和国未成年者保護法. 北京.（中国語）
中華人民共和国教育部（1999）中国共産党中央委員会国務院の教育改革，「素質教育」の推進を全面的に行う決定. 北京.（中国語）
中華人民共和国教育部（2001a）教育部義務教育における実験的カリキュラムの発行に関する通達.（中国語）
中華人民共和国教育部（2001b）義務教育「体育と健康」課程標準（2001 版）. 人民教育出版社：北京.（中国語）
中華人民共和国教育部（2008a）小学校・中学校・高等学校における健康教育の指導綱要. 人民教育出版社：北京.（中国語）
中華人民共和国教育部（2008b）義務教育「体育と健康」課程標準（2008 版）. 人民教育出版社：北京.（中国語）
端納(1933)衛生教育理論と実践. 大上海教育. 5：99.（中国語）
範才清・黄超文（2014）中国における健康教育のトレーサビリティー. 教師，01:7-9.（中国語）
胡鴻基（1933）公衆衛生概論. 商務印刷館：上海.（中国語）
胡鳳・常松（2011）民国時代における我が国の健康教育の普及モデル研究. 中国健康教育, 27:3.（中国語）
李健美・周偉（2012）学校健康教育の現状及び対策に関する研究. 教育教学研究，55：176-177.（中国語）
林楠（2012）中国の体育教員養成カリキュラムに関する研究：教職教養に焦点化して. 広島大学大学院教育学研究科博士論文.
劉文利・元英（2017）中国の小中学校の性教育政策の見直し（1984 年～2016 年）について. 教育と教学研究，31（7）：44-55.（中国語）
汪有齢（1901）学校衛生学. 教育世界. pp. 1-40.（中国語）

野村良和（2012）学校保健ハンドブック．教員養成系大学保健協議会．株式会社きょうせい：東京．p.2.

WHO（1997）Promoting health through schools(WHO technical report series 870). Report of a WHO expert committee on comprehensive school health education and promotion Geneva.

王建平（2001）学校健康教育の規律の概念についての一考察：日本の学校保健教育から見た中国の学校健康教育についての考察. 外国教育研究, 28：32-37.（中国語）

王健・馬軍・王翔（2005）健康教育．高等教育出版社：北京.（中国語）

王東勝・黄明豪（2008）明代の健康教育文集．江蘇人民出版社：南京.（中国語）

王瑶華（2020）清末・中華民国時代の身体検査制度とその実践に関する研究（1902 年から 1949 年）．北京科技大学博士論文.（中国語）

王飛・趙陽・趙淑華（2020）学校健康教育の発展におけるボトルネックと対応策．教学と管理, 19-21.（中国語）

項純（2006）「素質教育」を目指す教育評価改革: 政府公文書の検討を通して．教育目標・評価学会紀要, 16：43.

葉科（2010）民国時代における学校衛生に関する研究．浙江師範大学修士論文.（中国語）

陽継縄（2017）天地がひっくり返る中国の文化大革命の歴史．天地図書：香港.（中国語）

祖光懐（1983）健康教育の概念及び特徴．中国農村衛生事業管理, 3：39-42.（中国語）

周尚（1937）学校健康教育への理解．教育雑誌, 27：65.（中国語）

鄭華偉（2007）学校体育科教育課程改革の歴史的検討と反省．体育科学技術文献通報, 8：30-49.（中国語）

張丹紅・張蘇萌（2005）20 世紀前半における学校衛生と題して執筆された著書及び論述．中国学校衛生, 26（4）：293-297.（中国語）

張芯・馬軍・余小鳴（2009）改革開放 30 年の中国における学校衛生・健康教育に関する発展の成果．中国学校衛生, 30（5）：385-393.（中国語）

趙月輝（2019）中国における保健学習の実態に関する研究：安徽省を事例して．広島大学大学院教育研究科修士論文.

趙月輝・齊藤一彦・山平芳美（2020）中国安徽省の中学生における健康知識・意識に関する実態調査．保健科教育研究, 5：41-49.

令和３年度広島体育学会　大会プログラムおよび抄録集

講演会及び研究発表例会

日時：令和３年 12 月 11 日（土）　13：00 ～ 17：00

場所：広島大学　東千田キャンパス　S 棟 207 講義室

大会日程

◆ 13：00 ～ 13：10　開会挨拶

◆ 13：10 ～ 14：30　特別講演

座　長：岩田昌太郎（広島大学）

演者①：木村文子（エディオン女子陸上競技部）

演　題：世界の舞台を目指して

演者②：尾崎雄祐（広島大学）

演　題：トレーニングを信じることと，科学と経験

【休憩 10 分】

◆ 14：40 ～ 15：00　令和２年度広島体育学会奨励賞授与式・講演

受 賞 者：房野真也（広島文化学園大学）

受賞論文：房野真也・磨井祥夫・大塚道太・塩川満久・丸山啓史・森木吾郎・白石智也（2020）サッカーのインサイドキックにおける高低の蹴り分けに関する運動学的研究．運動とスポーツの科学，26（1）：69-76.

◆ 15：00 ～ 15：50　話題提供発表及び一般研究発表①（発表時間 10 分・質疑応答 5 分）

座長：山平芳美（広島市立大学）

《話題提供発表》

１．浦田悠理子（広島大学大学院人間社会科学研究科）

中学校の体育授業におけるコーディネーショントレーニング導入の有効性についての研究

―運動有能感と運動の楽しさや喜びに着目して―

《一般研究発表》

２．園中杏汰（広島大学大学院人間社会科学研究科）

アントラージュが陸上競技選手の競技成績と競技意欲に及ぼす影響

―高校時代と大学時代との比較を通して―

※以下，学生優秀発表賞対象

３．佐々木衆・吉岡慶亮・福永涼太・加藤嵩大・上田毅（広島大学大学院人間社会科学研究科）
サッカーにおけるゴールキーパーのダイビング動作について

【休憩 10 分】

◆ 16：00 ～ 16：50　一般研究発表②（発表時間 10 分・質疑応答 5 分）
座長：鬼塚純玲（広島文化学園大学）

４．宮田雅也（広島大学大学院人間社会科学研究科）
学校体育における感動体験と自己肯定感の関連についての研究

５．佐々木駿（広島大学大学院人間社会科学研究科）
「ゆるスポーツ」を活用したゴール型ゲームが中学生の運動有能感に及ぼす影響
―サッカーの授業実践を通して―

６．濵口和人・下山智大・出口達也（広島大学大学院人間社会科学研究科）
回転ボックスジャンプトレーニングが柔道選手の瞬発力に及ぼす影響

◆ 16：50 ～ 17：00　学生優秀発表賞投票・授与式，閉会挨拶

〔令和2年度広島体育学会奨励賞受賞論文要旨〕

サッカーのインサイドキックにおける高低の蹴り分けに関する運動学的研究

房野 真也（広島文化学園大学）・磨井 祥夫（福山平成大学）・大塚 道太（大分大学）・
塩川 満久（広島国際大学）・丸山 啓史（呉工業高等専門学校）・
森木 吾郎（広島文化学園大学）・白石 智也（広島文化学園大学）

1. 研究目的

本研究の目的は，サッカーのインサイドキックを対象として，高低を蹴り分ける上での技術的要点を運動学的に記述することであった．

2. 研究方法

被験者は，中国大学サッカーリーグの上位チームに所属する大学男子サッカー部員 14 名とした．被験者の年齢，身長，体重，競技歴はそれぞれ 21.0 ± 0.9 歳，172.0 ± 4.7cm，64.0 ± 4.4kg，13.8 ± 3.0 年（平均±標準偏差）であり，ポジションはフォワード（FW）4 人，ミッドフィルダー（MF）5 人，ディフェンス（DF）5 人であった．キックしやすい脚を利き脚と定義すると，すべての被験者は右脚が利き脚であった．的は，60cm × 90cm（縦×横）で，地面からの高さは，Low（0.4m），High（1.8m）であった．被験者には，利き脚のインサイドキックで的を狙って蹴るように指示した．被験者の助走距離は自由としたが，全ての被験者は１－５歩の助走であった．ボールスピードについては，試合でのパスを想定したスピードでキックするよう指示した．被験者は，それぞれの高さの的を狙う練習を行った後，本試行としてそれぞれの高さの的に５本当たるまで実施した．光学式モーションキャプチャシステム（Vicon 512;Oxford Metrics Inc.）を用いた．同期した赤外線カメラ６台のサンプリング周波数は 120fps とした．身体に反射マーカー（直径 25mm）を貼付した．マーカー貼付部位は，身体の左右について，第５中足骨遠位端，足関節外果，踵骨，大腿骨外側顆，大転子，上前腸骨棘，上後腸骨棘，及び肩峰とし，さらに石井・丸山[1]にならいボール（３点）とした．３次元絶対座標系は，的に向かい，前方を y 軸正方向，右方を x 軸正方向，上方を z 軸正方向と定義した．取得した３次元位置データは，６－８Hz の４次 Butterworth ローパスフィルタを用いて平滑化を行った．

3. 結果及び考察

High では，蹴り足インパクト高が低く，蹴り足インパクト位置がボール中心から遠いことが明らかになった．このことから，ボールと直接接触する足部の先端をボールの軸足側の下部に当ててインパクトを行っていることが示唆された．この理由として，ボール投射角を上げるためであると考えられた．また，軸足からボール中心までの距離が Low に比べ High が遠いことが明らかになった．この理由として，軸足をボールから遠い位置に踏み込み，足部のつま先側をボールの下部に当て，ボール投射角を上げるためであると考えられた．

これまでの先行研究ではキック動作によって生じるインパクト後のボール初速度は，様々な要因によって影響を受けることが報告されている．また，スイング速度はボール初速度との間に高い相関関係が認められ，スイング速度が上がればボール速度も増加することが明らかになっている．本研究では，Low に比べ High では，蹴り脚膝関節が大きく屈曲し，蹴り脚膝関節の伸展速度が速かった．これらのことから，バックスイングを大きくし，インパクトに向けて速く伸展させていることが示唆された．この理由としては，バックスイングを大きくし，インパクトに向けて速く伸展させることでスイング速度を上げるためであると考えられた．このことは，インサイドキックにおける足部速度は，主に膝関節の屈曲／伸展によって生み出されることを明らかにしている先行研究[2]を支持する結果であった．以上のことから，高い的を狙ったキックは，蹴り足つま先側をボールの中心より軸足側下部に当ててインパクトを行っていることが示唆され，その理由としては，ボール投射角を上げるためであると考えられた．

本研究の実験は，止まったボールにおけるキック動作であるため，実際の試合に近い状況においても同様の結果が得られるかについては，今後更に検討する必要があると考えられる．

1）石井秀幸，丸山剛生（2007）インサイドキックにおけるインパクト中のボール変形量と衝撃力の解析．スポーツ産業学研究, 17（2）:13-23.
2）Levanon, J., and Dapena, J. (1998) Comparison of the kinematics of the full-instep and pass kicks in soccer. Medicine and Science in Sports and Exercise, 30: 917-927.

〔話題提供発表要旨〕

中学校の体育授業における コーディネーショントレーニング導入の有効性に関する研究 ―運動有能感及び運動の楽しさや喜びに着目して―

浦田 悠理子（広島大学大学院人間社会科学研究科）

【背景】

子どもたちの知・徳・体を一体で育む「日本型教育」は，全人教育という面などで諸外国から高く評価されている（文部科学省，2021）．その中でも，体育は極めて重要な役割を担っていると考えられよう．例えば，日本型体育は，体力・健康の増進のみならず，非認知能力（忍耐力，社会性，好奇心，自尊心など）の向上が期待できる（JICA，2018）．このような日本型体育の「教育的意義」については世界から関心が高まりつつあり，途上国からのニーズも高い．筆者自身も青年海外協力隊として，日本型体育の知見をもって途上国で活動を展開した経験を有する．日本型体育の成果を感じる一方，指導方法など，日本型体育の課題も見出された．例えば，「楽しい体育」や，目標である「生涯スポーツの実現」にむけては課題が残る．これらの課題を解決するためには，すべての子どもたちに運動有能感及び運動の楽しさや喜びを味わわせることが重要であろう（鈴木ら，2016）．

ところで，世界各国の学校体育の実施内容は，大きく２つに分かれる（富本，2013）．富本（2013）によると，達成目標を持ち全員をそのレベルに引き上げようとする体育と，おおらかに自由にスポーツを楽しませるといったスポーツ教育学である．現在の達成主義の体育カリキュラムが，運動から逃避する子どもを形成している可能性があることを考えると，欧米で行われているような，のびのびと体を動かすという視点も必要なのではないかと思われる．日本型体育の良さを受け継ぎ，さらに発展させるために，欧米のスポーツ教育学導入の可能性を探りたい．中央教育審議会（2021）も，令和の日本型教育の構築にむけた今後の方向性の１つに，「二項対立」の陥穽に陥らないことを挙げている．教育的意義を持つ日本型体育と，自由に体を動かすことを楽しむ欧米のスポーツ教育学を適切に組み合わせて活かしていくべきであると考えられる．

そのために，本研究では，欧米のスポーツ教育学の中でもコーディネーショントレーニングに着目し，体育授業における導入の有効性を検証することを試みる．コーディネーショントレーニングの導入によって，運動有能感を高め，運動の楽しさや喜びを味わわせることができることが明らかになれば，日本型体育の課題解決及びさらなる発展の一助となるであろう．ひいては，日本型体育の発展から，令和の日本型教育が目指す「すべての子どもたちの可能性を引き出す，個別最適な学びと協同的な学びの実現」（中央教育審議会，2021）に寄与できるのではないかと考えられる．

【方法】

鈴木ら（2015）は，運動嫌いの形成において中学校期が大きな影響を及ぼす可能性があり，中学生にこそ運動に好意をもつような授業が必要であると指摘していることから，研究対象は中学生に設定する．

調査方法については，体つくり運動領域ではなく，球技やその他の運動領域の単元で実施する．２クラスの授業において，単元の前半と後半で，コーディネーショントレーニングを用いたウォーミングアップを行う介入群を入れ替える．アンケートは単元期間内に３度実施する．

調査内容は，運動有能感尺度（岡澤，1996）及び運動の楽しさや喜びに関する自由記述である．

【主な引用参考文献】

- 中央教育審議会答申（2021）「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～．
- JICA（2018）JICA「スポーツと開発」事業取り組み方針．
- 鈴木秀人・山本理人・佐藤善人・長見真・越川茂樹・小出高義（2015）中学校・高校の体育授業づくり入門．学文社．
- 鈴木直樹・梅澤秋久・宮本乙女（2016）学び手の視点から創る中学校・高等学校の保健体育授業〈体育編〉．大学教育出版．

〔一般研究発表要旨〕

アントラージュが陸上競技選手の競技成績と競技意欲に及ぼす影響
―高校時代と大学時代の比較を通して―

園中 杏汰（広島大学大学院人間社会科学研究科）

【目的】

近年，指導者や家族などのアスリートを取り巻く関係者がアスリート･アントラージュ（以下,「アントラージュ」と略す）と言われるようになり，選手のパフォーマンスの向上やサポートに関する取り組みが重要視されている．しかし，このアントラージュという言葉は一般に浸透していないことが予想される．また，アントラージュに関する研究について，指導者以外のアントラージュに関する研究が少ない点やアントラージュの変化が選手に及ぼす影響について検討した研究は管見の限り見られない点が課題としてあげられる．このような点について検討することで，アントラージュに関する新たな知見が得られると考えられる．

また，本研究は，近年競技者育成に力を入れているが，様々な課題を抱えている陸上競技に着目し，課題の解決に寄与する理想的なアントラージュの在り方について検討する.そこで本研究は，大学生の陸上選手を対象に，質問紙調査およびインタビュー調査を行うことで，選手とアントラージュの関係の実態と課題を明らかにすること，ならびにアントラージュの変化が現在の競技成績と競技意欲に与える影響を明らかにすることである．

【方法】

調査①として，A 大学の陸上競技部に所属する学生に質問紙調査を実施し，高校時代・大学時代の競技生活およびアントラージュに関する情報を得た．結果の分析は t 検定を用いて行い，男女別，学年別，競技レベル別，専門種目別，記録の変化別の５つの観点から行った．

調査②として質問紙調査の結果をもとに選定した対象者にインタビュー調査を実施し，高校・大学のアントラージュに関する具体的な回答，および現在の競技成績と競技意欲に影響を与えている要因などについて回答を求めた．

【結果】

全体の傾向としては，大学以降のモチベーションと成績に対する自己評価が高校時代と比べて有意に低下しており（$P<0.05$），チームメイトに関する項目についても，５因子のうち３因子が有意に低下した傾向が見られた（$P<0.05$）．男子選手と女子選手を比較した結果では，女子選手の大学以降のモチベーションと内発的動機付けが男子選手よりも有意に低かった（$P<0.05$）．学年別に分けて結果を比較したところ，大学１・２年生の方が大学３年生以上よりも家族との関わりが減ったという回答が多く，チームメイトに関する項目についても２因子で高校と比べ有意な低下が見られた（$P<0.05$）．競技レベル別に分けて結果を比較したところ，全国大会出場経験者の方が出場経験がない選手に比べて高校時代の精神的なきつさ，外発的動機付け，指導者の厳しさが有意に高く（$P<0.05$），大学以降の内発的動機付けは有意に低下していた（$P<0.05$）．種目別に分けて結果を比較したところ，中長距離の選手が大学のチームメイトに関する項目について他の種目の選手と比べて有意に高い値を示した（$P<0.05$）．記録の変化別に分けて結果を比較したところ，記録向上群が大学以降の内発的動機付けを有意に向上させていた（$P<0.05$）．一方，記録停滞・低下群では高校以降に比べてモチベーションやチームメイトに関する項目で有意な低下が見られた（$P<0.05$）．

【考察】

男女別の結果については，女子の部員数が少ないことや練習メニューが男子選手中心に設定されていること，女子選手のモチベーションを低下させたと推測される．学年別の結果については，大学１・２年生は大学入学から時間が経っていないため，上級生に比べアントラージュの変化に敏感であることが考えられる．競技レベル別・記録の変化別の結果については，高校時代に追い込んだ練習をしている選手ほどその後の伸び悩みに直面し，モチベーションが低下する傾向があることが推察される．種目別の結果からは，中長距離は他の競技と比べてチームメイトと関わりが深いことが窺える．

〔一般研究発表要旨〕

サッカーのゴールキーパーにおけるダイビング動作の研究

佐々木 衆・吉岡 慶亮・福永 涼太・加藤 嵩大・上田 毅（広島大学大学院人間社会科学研究科）

【目的】

これまで，サッカーにおいてフィールドに比べて少数ではあるが，複数のゴールキーパーに関する研究は報告されている．しかし，これまでの研究はどれも熟練者のみの研究である．

現代の指導現場では，熟練の果ての結果ではなく過程を含めた検討が必要であると考えられる．このように研究の目的は，熟練者と未経験者を対象に実際のシュートを想定して反射的判断要素を加えた場合のダイビング動作を実施している時に，反応時間と到達時間に及ぼす影響を検討し，反応時間と到達時間の間におけるゴールキーパーの技術を明らかにすることを目的とした．

【方法】

対象者はＨ大学の体育会サッカー部所属のゴールキーパー５名(174.8 ± 6.9cm, 71.2 ± 1.9kg)と，同大学の他の部活動のゴールキーパー未経験者５名（174.8 ± 3.31cm, 70.3 ± 7.3kg）であった．ダイビング動作の評価者はゴールキーパー歴が10年以上かゴールキーパーの指導経験のあるもの10名とした．

実際の試合状況を想定し，２方向ランダムに点灯させるよう設定し，被験者には「できるだけ早く到達するように」伝えた．また，計測上の都合により pre jump は行わないよう指示した．被験者は15回２セット行い，うまく計測できない場合はカウントせず，結果として採用しなかった．

被験者は屋内で厚さ40cmの体操用マットの上にボールを設置した. 到達地点は３ｍに設置した．10cm離した２枚のフォーファスト社のマットスイッチ FMT-３M5035 に乗り構え，正面６ｍにあるフォーアシスト社の８方向 LED 表示機（10 × 10cm）FMT-LED８の点灯後に反応して，ダイビング動作を行って目標のボールに触るよう設置した．

測定項目は光刺激への反応時間と目標のボールへの到達時間を測定した．ダイビング動作の方向の指定は８方向 LED 表示機の0.5秒間の予備点灯の後，左右２方向ランダムに点灯した．

【結果】

ゴールキーパー経験者と未経験者において反応時間と到達時間を算出した結果，経験者では反応時間の平均は 0.378 ± 0.035（s）で，到達時間の平均は 1.113 ± 0.034 であった．一方，５人のゴールキーパー未経験者においての反応時間と平均は 1.113 ± 0.181(s)であり, 到達時間は 1.163 ± 0.067（s）となった．経験者と未経験者を比較すると，反応時間においては有意な差が見られなかったが，到達時間においては経験者が有意に短い結果が得られた（$p<0.05$）．

ダイビング動作姿勢の評価を「直線的に加速しているか」「十分に踏み切れているか」「身体を最大限伸ばせているか」の３項目に設定し，熟練者10名にしてもらった結果，「直線的に加速しているか」においては，経験者が平均 2.24 ± 0.67 で未経験者が平均 1.67 ± 0.71 となり，経験者と未経験者の間に有意な差が見られた($p<0.05$).「ボール側の脚はしっかり踏み切れているか」においては経験者が平均 2.13 ± 0.69 で未経験者が平均 2.00 ± 0.67 となり，有意な差は見られなかった($p<0.05$).「体を最大限伸ばしているか」においては経験者が平均 2.24 ± 0.77 で未経験者が 1.86 ± 0.8 となり，有意な差が見られた（$p<0.05$）．

【結論】

本研究では，サッカーのゴールキーパーのダイビング動作における，反応時間と到達時間に着目し未経験者と経験者を対象に実験を行い，様々なカテゴリーにおけるサッカー指導現場での指導に役立てることを目的に研究を行った．

結果として，以下の２点が認められた．

1）反応時間においては経験者と未経験者間に有意差がなかったが，到達時間においては経験者の方が有意に短かった．

2）熟練者によって経験者と未経験者のダイビング動作を評価した結果, 経験者は未経験者より，「直線的に加速する」と「身体を最大限伸ばす」においては有意差があったが，「十分に踏切ができているか」は有意差がなかった．

〔一般研究発表要旨〕

学校体育における感動体験と自己肯定感の関連についての研究

宮田 雅也（広島大学大学院人間社会科学研究科）

【目的】

近年，日本の青少年における自己肯定感の低さが問題視されている．自己肯定感が低いことは学習意欲の低下や，問題行動を引き起こす要因になるといわれている．そのため，青少年の自己肯定感を向上させることが重要である．感情が強く動く経験（以下，感動体験）が自己肯定感を高めることが明らかになっており，学校教育における感動体験を通して，青少年の自己肯定感を向上させる必要があると考えられる．学校体育は，他の教科に比べて周りから注目される機会や達成感を味わうなど感動体験の機会が多くある．それが，自己肯定感の向上に繋がる可能性がある一方で，運動が苦手な子にとっては苦痛を感じる機会になる可能性も否定できない．そこで本研究は，学校体育におけるポジティブ及びネガティブな感動体験の実態を明らかにし，さらにその感動体験の有無と自己肯定感の高さとの関連について明らかにすることを目的とする．

【方法】

調査①として，大学生に中学校・高校時の学校体育で経験したポジティブ及びネガティブな感動体験についてアンケートを取った．その後，カテゴリー化を行い，どのような感動体験が多くされているのかを明らかにした．また，学校体育を楽しかったと感じている群（以下，体育好意群）と楽しくなかったと感じている群（以下，体育非好意群）に分け，結果の違いを分析した．

調査②として，学校体育における感動体験の各カテゴリーで質問項目を作成した．加えて自己肯定感を測定するために，自己肯定意識尺度（平石，1990）の対自己領域 18 項目を使用し，大学生にアンケートを実施した．その結果をそれぞれ合計し得点化を行い，相関関係を求めるために，ピアソンの積率相関係数を算出した．

【結果】

調査①について，学校体育におけるポジティブな感動体験の回答の割合が高い５つは，〈結果〉18.29％，〈特になし〉13.71％〈教師からの称賛〉10.86％，〈技能〉10.29％，〈友人との交友〉9.71％となった．このことから，結果を出せたり，技能を身につけたりすることや人に褒められたり，友人との良好な関係性を築き楽しく運動を行えたりすることに対してポジティブに感じていることがわかる．学校体育におけるネガティブな感動体験の回答の割合が高い５つは〈特になし〉27.84％，〈種目〉12.37％，〈体育特性〉11.34％，〈失敗〉10.31％，〈能力〉10.31％となった．このことから，学校体育でネガティブに感じた体験がないという人が多くいる一方で，授業内容やクラスの雰囲気，競技レベルによってはネガティブな感情をもつことに繋がりかねないということが窺える．

また，体育好意群のポジティブな感動体験は〈結果〉，〈技能〉，〈教師からの称賛〉の割合が高く，ネガティブな感動体験は，〈特になし〉，〈種目〉，〈体育特性〉，〈能力〉の割合が高かった．体育非好意群のポジティブな感動体験は〈特になし〉，〈教師からの称賛〉，〈結果〉，〈友人との交友〉の割合が高く，ネガティブな感動体験は〈失敗〉，〈人に見られること〉，〈体育特性〉の割合が高かった．このように体育好意群と体育非好意群によってポジティブ及びネガティブな感動体験の回答の割合に違いがあるとわかる．

調査②について，ピアソンの積率相関係数を算出した結果，学校体育におけるポジティブな感動体験と自己肯定感の相関は，r=0.35，学校体育におけるネガティブな感動体験と自己肯定感の相関は，r= − 0.24 であった．したがって，学校体育における感動体験と自己肯定感にはやや相関がみられることが示された．

【結論】

学校体育における感動体験と自己肯定感に相関がややみられ，学校体育が青少年の自己肯定感向上に繋がる可能性が示唆された．しかし，学校体育では，ネガティブに感じる経験をすることもあるため，体育教師はその点も考慮した授業づくりをしていく必要があると考えられる．また，学校体育を楽しいと感じている人と楽しくないと感じている人によっても違いがある．そのため，今後さらに研究を深め，全員の自己肯定感を向上し得るような学校体育について検討する必要がある．

〔一般研究発表要旨〕

「ゆるスポーツ」を活用したゴール型ゲームが中学生の運動有能感に及ぼす影響 ―サッカーの授業実践を通して―

佐々木 駿（広島大学大学院人間社会科学研究科）

【目的】

中学生は小学生と比べ，授業内容が専門的になること，また高校生に比べ，スポーツへの興味の減少があることなどの要因から運動の二極化を生じやすいとされている．この問題に対し，保健体育科では生徒に対し運動やスポーツに対する愛好的態度を養うことが必要であると考えられる．この愛好的態度を養うための一方法として，生徒の運動有能感を高めることが有効であることが明らかになっている．

しかし，ゴール型に分類されるサッカーは，足でボールを操作するといった特有の技能が求められるため，技能格差が生じやすく，運動が苦手な生徒を「運動嫌い」へ助長している可能性が窺える．

そこで本研究では,「ゆるスポーツ」である「ステイホームサッカー」をルールや人数，用具を工夫し,サッカーの下位教材として展開することで,中学生の運動有能感にどのような影響を及ぼすのかについて検討することを目的とする．

【方法】

本調査は，A 大学附属 B 中学校に所属する１年生の２クラス，64 名（男子 32 名，女子 32 名）を対象とした．

授業概要としては，ゴール型におけるサッカーの授業を９時間分設定した．１時間目に通常のサッカーの試合を行い，４，５時間目にゆるスポーツの「ステイホームサッカー」を参考にした「フープサッカー」を実施した．その際，１時間目後と５時間目後に岡沢ら（1996）の「運動有能感測定尺度」を参考に筆者が作成した質問紙調査を行い，そのデータを t 検定で分析し，実施前後での比較を行った．

【結果】

「身体的有能さの認知」は，どれも有意差は認められなかった．

「統制感」は，女子が 1.47 点も有意に大きく減少した（t（31）= 3.24，p ＜ .01）．

「受容感」は，どれも有意差が認められなかった．「運動有能感合計」は，女子が 1.75 点，有意に減少した（t（31）= 2.29，p ＜ .05）．（表 1）

表１　実施前後の平均得点

	群	事前 MEAN（SD）	事後 MEAN（SD）	t 値
身体的有能さの認知	全体	9.23（ 3.99）	9.31（3.91）	0.28
	男子	9.66（ 4.18）	10.22（3.95）	1.39
	女子	8.65（ 3.67）	8.41（3.15）	0.59
統制感	全体	14.44（ 4.15）	14.08（4.32）	0.99
	男子	14.16（ 4.87）	14.91（4.10）	1.51
	女子	14.72（ 3.25）	13.25（4.38）	3.24*
受容感	全体	15.00（ 3.87）	15.20（3.67）	0.63
	男子	14.97（ 3.93）	15.22（3.76）	0.48
	女子	15.06（ 3.78）	15.19（3.54）	0.32
運動有能感合計	全体	38.67（ 9.36）	38.58（9.39）	0.14
	男子	38.75（10.54）	40.31（9.47）	1.58
	女子	38.59（ 8.00）	36.84（8.98）	2.29*

*p ＜ .05

【考察】

「フープサッカー」実施後の運動有能感の合計は，実施前と比較すると，女子において有意に減少する形となった．その原因として，女子の「統制感」が大幅に減少したことが挙げられる．

その要因を考察すると，フラフープを使用したことによる行動範囲の制限が大きな要因と推察される．より正確性が求められる中でのトラップ，パス，シュートは，通常のサッカーよりも難しい技術だったのではないかと考えられる．

ただ，「受容感」は僅かではあるが，男女ともに増加した．このことは，チーム全員でパスを繋いでゴールを目指すという「フープサッカー」の特性がチーム内での協力を生み出したと考えられる．

〔一般研究発表要旨〕

回転ボックスジャンプトレーニングが柔道選手の瞬発力に及ぼす影響

濵口 和人・下山 智大・出口 達也（広島大学大学院人間社会科学研究科）

【目的】

柔道の投技において，より効果的な投げ動作を行うために，筋力，瞬発力，敏捷性などの様々な体力的要素が求められている（菅波 2005）．柔道の実戦の中では，ストレッチショートニングサイクル運動（SSC）を利用して，技を掛けた瞬間に大きな力を発揮することができ，投技のパフォーマンスに非常に重要であるとされている（Monteiro et al 2016）．

柔道の指導現場では，素早く技に入れるよう，一般的にボックスジャンプトレーニングが取り入れられているが，動作の特異性から鑑みて，腰を回転させる柔道の技とは動きが異なっている．このことから，通常のボックスジャンプトレーニングに捻りを加える回転ボックスジャンプトレーニングの方が，柔道の腰を回転させる投技に対して効果的ではないかと考えた．

そこで本研究では，回転ボックスジャンプトレーニングが柔道選手の瞬発力に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした．

【方法】

健常な大学柔道選手 18 名を対象とした．回転ボックスジャンプトレーニングを行う群（以下，RBJ 群）6 名，ボックスジャンプトレーニングを行う群（以下，BJ 群）6 名そして，トレーニングを行わない群（以下，CON 群）6 名の 3 群に区分した．トレーニング前における RJ index の初期値に差がないよう配慮し RBJ 群，BJ 群，CON 群に区分した．なお，トレーニング期間の前後にパフォーマンステストを行った．

トレーニングは，RBJ 群，BJ 群ともにそれぞれのトレーニングを 10 回×３セット行った．期間は３日／週，４週間，計 12 回実施した．

パフォーマンステストは，マットスイッチを（DKH 社製）を用いて，対象者は５試行リバウンドジャンプを行い，最も RJ index の数値が優れた試行を採用した．評価項目は，リバウンドジャンプにおける RJ index，跳躍高，接地時間，内省報告とした．

【結果】

RJ index では，各群とトレーニング前後をそれぞれ因子として，二元配置分散分析を行った結果，交互作用の有意性は認められなかったものの，主効果の有意差は認められた．多重比較検定を行った結果，BJ 群と CON 群は，有意な差はみられなかったのに対し，RBJ 群は，Pre に比べ Post 時の RJ index の値が有意に向上した（$p < .001$）．

跳躍高では，各群とトレーニング前後をそれぞれ因子として，二元配置分散分析を行った結果，交互作用の有意性は認められなかったものの，主効果の有意差は認められた．多重比較検定を行った結果，BJ 群と CON 群において，有意な差はみられなかった．しかしながら，RBJ 群は，Pre と Post においてリバウンドジャンプにおける跳躍高の値が有意に向上した（$p < .01$）．

接地時間では，各群とトレーニング前後をそれぞれ因子として，二元配置分散分析を行った結果，各群ともにトレーニング前後で有意な差は認められなかった．

【結論】

これらのことから，本研究で提案された回転ボックスジャンプトレーニングを用いた方が，一般的なボックスジャンプトレーニングよりも，リバウンドジャンプにおける RJ index，跳躍高が有意に向上したことが明らかになった．また，内省報告から，全体的に運動強度と疲労度が低いということが明らかになった．それを踏まえると，階級によっては，錘をもってトレーニングを行うことや，もう少しボックスの高さを高くするといった工夫をすることにより，さらなる効果が期待できるのではないかと考えられる．

編 集 委 員 会

黒　坂　志　穂（委員長）武　田　守　弘
磨　井　祥　夫

Editorial Committee

S.Kurosaka (Chief Editor)　M.Takeda
S.Usui

2022年３月31日発行
発 行 所　広 島 体 育 学 会　非売品

〒739-8521　東広島市鏡山1丁目７番１号
広島大学大学院総合科学研究科内
TEL（082）424-6592
振替　広島01330-4-16226

編集発行者　東　川　安　雄
印　刷　所　株式会社ニシキプリント
〒733-0833　広島市西区商工センター７丁目5-33

March 2022 Vol. 48

HIROSHIMA JOURNAL OF PHYSICAL EDUCATION

CONTENTS

Review

Yusuke MATSUMOTO, Tomoya SHIRAISHI, Kazuhiko SAITO
Outcomes of Long-Distance Racing Classes:
A Literature Review Focusing on Students' Attitude toward Long-Distance Racing 1

Material

Yuehui ZHAO, Kazuhiko SAITO, Yoshimi YAMAHIRA, Ren FUJISHIMA
Historical Changes of School Health Education in China 15

Proceeding of the Meeting of Hiroshima Society of Physical Education in 2021

Edited by
Hiroshima Society of Physical Education